

さばえ近松文学賞2016～恋話(KOIBANA)～

受賞作品集

受賞作品

◆近松賞

「眼鏡と先輩」

上野陽平（千葉県銚子市）

◆優秀賞

「妙空尼の恋」  
「誘発」

中野純賢（福井県坂井市）  
石井泰子（東京都大田区）

◆佳作

「雅代の白い花」  
「千姫の初恋」

渡辺庸子（福井県福井市）  
西村一江（山口県山口市）

「銀の花かんざし」

「季節を過ぎた公園で」

「恋は柔らかに」

鷺田恒郎（北海道北広島市）

井原敏貴（東京都板橋区）

松尾智恵子（大阪府枚方市）

◆松平昌親賞 学生部門

「ミズバシヨウ」

北崎花那子（福岡県福岡市）

『白熱の審査会』

八月十一日、一次通過作品二十四作(うち学生部門三作)が自宅に届いた。恋にまつわるコンクールだが、近松作品には犯罪物が多い。何点かはあるかと思っていたが、通過作には一点もなかった。近松賞はシンプルに恋のテーマと向き合った『眼鏡と先輩』である。

高校を舞台に、一年の季節を通して僕の視点で先輩女子への感情の揺れを描く物語。平凡なエピソードの積み重ねで、僕と先輩の微妙な距離感を巧みに表現し、結末の僕の涙に繋がっていた。

鯖江を示すものが眼鏡と駅名しかないが、取材ができないのであれば、中途半端な知識を捨てるのは一つの手である。そのため題材の評価はないが、僕と先輩の心情に、自然に寄り添うことができた点良かった。

優秀賞作『妙空尼の恋』は、僧侶に懸想していた尼が郭の女と入れ替わる物語。中編をまとめたよくなあらずじ感があり、読後感についてもずいぶん意見交換がなされたが、三人の立場から物語を楽しめる点の評価した。

優秀賞作『誘発』は、小道具の使い方や主人公の言動の一貫性において、疑問があった。

主人公は家の都合で嫌な男と挙式した日に、雪中裸足で他の男の元へ行くのだが、家を捨てる覚悟をしたのに、家の象徴でもある打ち掛けを持ち出し、嫌な男との婚礼衣装を再び着て暖かいと感じる。さらに好きな男と合流した後も二人で打ち掛けを被るのだ。

この一連の言動に納得がいかなかった。作者が気に入った展開や表現を優先した感も否めなかったが、総合力で他とは一線を引いた。

さて『雅代の白い花』は優秀賞まであと一歩だった。前半の終端は良かったが、物語を動かす重要な場面が一番おざなりだった。

『千姫の恋』は姫が家康の孫である必然性がなく、むしろ抜群の認知度を誇る千姫の心理描写や「らしさ」を巡って、疑問符がついた。

『銀の花かんざし』は、短編の分量に対して周辺事情の情報量が多く、散漫な話になってしまった。題材の取り組みを評価した。

『恋は柔らかかに』は展開のひねりを評価した。『季節を過ぎた公園で』は過去の恋の面影を描いていたが、応募作はこの類が多かった。良くも悪くも今回の平均的な作品だった。

最後に、学生賞『ミズバショウ』は花言葉「美しい思い出」を題材にした作品。タサカとのやり取りは丁寧で、筋がまとまっていた。

というわけで、近松賞と学生賞以外は混戦した審査会だった。今無事に最終講評を終えることができ、ほっとしている。応募者の皆さまも、お疲れ様でした。

総評・審査員長 林 哲治

完成度が高い「福井発見」の小説

応募作品は、読み手を引きつける作品が多かった。テーマ、構成、文章表現等で優れた点が多く、小説の完成度は高かった。テーマ性でいえば、何が言いたいのかが明確であった。登場人物は、なぜそういう行動をとり、セリフを言ったのか、その理由が説得力をもって書き表されていた。因果関係がしっかりと書かれており、小説の芯が揺らぐことはなかった。最後に、鯖江に関わる「眼鏡・漆器・浄瑠璃」という言葉の書き方である。作品内容、風土とつながっており、新たな福井発見の小説になっていて読み応えがあった。

目次

受賞作品

講評・特別審査員

桂 美人

総評・審査員長

林 哲治

「眼鏡と先輩」

上野陽平

「妙空尼の恋」

中野純賢

「誘発」

石井泰子

「雅代の白い花」

渡辺庸子

「千姫の初恋」

西村一江

「銀の花かんざし」

鷲田恒郎

「季節を過ぎた公園で」

井原敏貴

「恋は柔らかに」

松尾智恵子

「ミズバショウ」

北崎花那子

近松の里たちまちスタンプラリーマップ

掲載の受賞作品は応募に際し、送られてきた内容をそのまま掲載してあり、校正・校閲などの編集は加えておりません。



## 「眼鏡と先輩」

上野陽平

この年の桜は入学式の日には満開を迎えた。あたり一面が桜色に染まる、一年のうちのわずか数日。いつも感情の抑揚が乏しいと言われる僕に珍しく好奇心が芽生えたのは、ときおり視界に入る鮮やかな桜色が原因かもしれない。入学式が進み生徒会役員の紹介が始まったとき、僕はその人のことが妙に気になった。中学生や高校生にはあまり見かけない銀縁眼鏡。文化委員長と紹介された彼女が小さくお辞儀をした時、フレームがかすかに水銀灯の光を反射した。綺麗で、他の人とはどこか違う。それが中崎梨子先輩に対する僕の第一印象だった。

数日経った放課後、僕は図書室へ向かった。文化委員会は図書委員会のようなものらしく、図書室の貸出管理が主な役割だった。選挙制ではなく部活のように自由に参加できる。図書室に入ると、二人の女子生徒が席に座って小声で楽しそうに話していた。僕に視線が注がれる。

「もしかして入会希望？」僕が頷くと、二人は揃って笑った。「じゃあ、委員長に」と、指差す先には中崎先輩が椅子に座って本を読んでいた。入学式の日と同じ銀縁眼鏡を掛けている。入会したい旨を告げると、先輩は顔を上げて微笑んだ。

「うん、歓迎するよ」と、オカリナみたいな、微かにビブラートのかかったような不思議で綺麗な声だっ

た。こうして僕は文化委員になった。

帰りの階段を下りながら、僕は前を歩く先輩の鞆に眼鏡のミニチュアのストラップが揺れているのに気づいた。掛けているのとお揃いの銀縁だった。

梅雨が来た。雨の日の図書室は蛍光灯があっても少し薄暗い。先輩はいつものように本を読んでいる。僕は備品のノートパソコンで貸出記録を整理していた。画面の向こうの先輩の横顔と眼鏡が時折視界に入る。梅雨空のような色のフレームをぼんやり見つめていたら、いつの間にか先輩が首を傾げて僕のほうを見ていた。僕は恥ずかしくて慌てて目をそらした。

「中間試験、数学よくなかったんだって？」と先輩は言った。僕は頷いた。「どこが？」「二次関数です」「そっか」僕は二次関数の問題が解けなくて赤点の一步手前だったのだ。

「平方完成ができるようになれば余裕だから」先輩は僕の隣に座って、貸出記録用のノートと鉛筆でグラフと数式を書き始めた。最近わかったことだけど、先輩は数学が得意だ。数学だけでなくその他の教科も。

「先輩、勉強好きなんですね」と僕は言った。数式を書いている先輩はなんとなく楽しそうだった。細い指がうきうきしている。

「まあ、そうかな」先輩はちよつと恥ずかしそうに、口元に小さく笑みを浮かべた。

夏休みが近い。窓の外には蝉の声と、暑そうな日差し。それに対して図書室の中は、壊れかけとはいえエアコンのおかげで多少は涼しい。ほどよく生温い空気がエアコンから流れ出てくる。僕は眠い。先輩も珍しく本を読みながらうつらうつらしていて、眼鏡が落ちそうになっていた。僕は身を乗り出して、向かいに座っている先輩の眼鏡を手で支えた。先輩の反応はなく、寝入っているみたいだ。僕は先輩の眼鏡を外してみた。フレームにはかすかに体温が移っていて、指先でそれを感じて心臓がドキドキした。すぐくいけないことをしているような気がした。眼鏡を顔の前にかざしてレンズ越しに図書室を眺めてみる。視界が歪んで頭がくらくらした。

「おじいちゃんに作ってもらったの」と、いきなり話しかけられて僕は心臓が飛び出しそうだった。先輩が焦点の合わない目で僕を見ていた。

「すみません、勝手に」僕は謝って眼鏡を返す。怒られるかと思っただけ先輩はいつもの微笑を浮かべただけだった。

「おじいちゃん、眼鏡屋やったの。私にはそれが一番似合うんだって。高校生であんまりいないよね、銀縁」と、フレームを指先でなぞる。きつとお気に入りなのだ。

夏休みが終わっても夏は終わらない。空気は肌に絡みつくように湿気を含んで重い。放課後、僕は涼気を求めて図書室へ行った。

「中崎先輩なら今日来てないよ」二年生の仲良し二人組は僕が尋ねてもいないのにそう言った。僕は椅

子に座つてしばらくエアコンの風に当たっていたけれど、休み明けは仕事もなく、帰り支度をして下の階へ降りた。音楽室の明かりが点いていた。今日は吹奏楽部の演奏は聞こえず、代わりにピアノの音が防音室から漏れている。扉を少し開けて覗いてみると、弾いているのは先輩だった。いつもと違って眼鏡を掛けていない。夕日を浴びた横顔が綺麗だった。僕は端っここの席に静かに座った。先輩の弾く音楽は子守唄のようにのんびりとして、夢の中のようだ。弾き終わつて、先輩が眼鏡を掛ける。

「いたの？」と、僕を見つけた先輩は驚いた様子だった。「見えないから」閉じた譜面で顔の下半分を隠して、「知らずに弾いてたよ」と、恥ずかしそうに言った。僕は眼鏡を掛けていなかった理由を尋ねた。「フレームが譜面に重なると見にくいんだよ。この距離なら裸眼でもなんとか見えるから、そのほうがいいんだ」

先輩のクラスは文化祭の模擬店でピアノカフェをやるらしい。ピアノの経験者がほとんどいないので駆りだされたとのこと。

「何でもできるんですね」と僕は言った。先輩はちよつと照れた様子で譜面の表紙に目を落として、「そんなことないよ」と答えた。

文化祭の日、文化委員は模擬店や出し物のチェックが仕事だった。先輩のクラスに行ったのは演奏の合間。客は少なく、暇そうな店番の三年生が僕を見つけて出てきた。彼女は僕の腕章に目を留める。「あ、君が噂の後輩君か。ちよつと待つて。梨子呼んでくるから」しばらくして、中崎先輩が連れ出さ

れてきた。

「しょうがないな」と呟いて、先輩は教壇に置かれた電子ピアノの前に座る。急かされたせいか眼鏡を掛けたまま。指先の動きとともに夢の中に誘うピアノの音色が放たれる。聞きつけた生徒たちがピアノカフエに集まってくる。ふと、顔を上げた先輩と目が合った。その瞬間、僕にも分かるミスタッチで音が外れた。

「後輩君、梨子の成績、知ってる？」演奏が終わってから、先輩の友達らしい三年生に尋ねられた。今日出たという模試の結果を僕に見せる。

「それ、私の」と先輩が横から取り返そうとしたけれど、届かなかった。

「いいじゃん、別に。ほら後輩君、見てごらん」目を疑うほどに高い偏差値と、誰でも知っている名門大学の名前が記されていた。判定は、A。

「ね、すごいでしょ？」僕は頷いた。隣で恥ずかしそうにしている先輩が、急に遠い存在になっていく。

秋が終わりそうだと思っているうちに冬は一気に来た。十二月になると雪が積もった。その日、図書室の外扉が開いていることに気づいて行ってみると、外階段で先輩が空を見上げていた。足下では積もった雪がじわりと融けてコンクリートを濡らしている。雪の匂いがする。

「どうしたんですか、寒いですよ？」と僕は言った。

「あっちに行ったら雪、降らないんだなって思って」あっち、というのはきつと、大学のこと。太平洋側は雪

がほとんど降らない。

「あと三ヶ月」と先輩が呟いた。あと三ヶ月で、先輩はここからいなくなる。先輩は寂しいと思ったりするんだらうか。僕にはよくわからない。

静かな外階段に、しんしんと雪の積もる音がする。先輩の眼鏡に雪が落ちて、水玉になった。

年が明けると、三年生は受験勉強のため委員会活動には参加しなくなる。先輩に会うこともなくなった。僕は学校からの帰りにふと思いついて眼鏡屋に行ってみた。先輩のとよく似た銀縁の眼鏡をつけて、掛けてみた。鏡を見ると、なんだかちぐはぐな姿の男子高校生が映っていた。僕には銀縁眼鏡は似合わない。

三月になって、先輩が志望校に合格したことを聞いた。

今年は桜が早い。駅前の桜はもう開花が始まっていた。大きなキャリケースを傍らに持つて桜の下に立つ先輩に、何という別れの言葉を掛けるべきか僕は迷っていた。言いたいことはたくさんあるはずだけど、もやもやと渦巻くばかりで形のある言葉は何一つ浮かばなかった。

「ずっと一緒にいたいです」間違っている気がしたけれど、僕には正解はわからなかった。

「それ、プロポーズの言葉だよ」と先輩は笑った。もしかしたら本当にプロポーズなのかもしれない。僕にはわからない。

先輩の両親が改札口の前から呼びかける。特急がまもなくやってくる。先輩が歩き出す。

「あの」と僕は呼び止めた。けれども何も言葉がつかない。遠くから列車が走る音が聞こえる。先輩はしゃがみこみ、キャリーケースのポケットに手を入れた。

「これ、あげる」手渡されたのはメガネストラップだった。銀縁の、お揃いの。

「元気でね」先輩は微笑んで、くるりと背を向ける。駅舎に入る前に、先輩は小さく手を振ってくれた。僕も手を振り返した。途端に涙が出てきて何が何だかわからなくなった。

先輩の姿が見えなくなった時、僕はようやく、別れが寂しいのだと知った。

## 「妙空尼の恋」

中野純賢

「お里、今夜私とここから逃げるんだ。今しかない。私は、今夜ここに泊まる。夜明前に一緒に出るんだ。」

「でも捕まったら、放空様まで……。」

「心配するな。手は考えてある。私について来ておくれ。」

障子窓から差し込む初夏の月明かりが放空とお里を照らし、二人はしっかりと抱き合った。放空は、お里が少しやつれたように感じた。

ここは、京の町のとある郭くわくである。普段は客引きの男衆の声が絶え間なく聞こえて来るが、月初めで客が少ないせい、静かな夜であった。

お里は、越前の国・鯖江の河和田村の生まれであった。父親は、代々続く漆職人で、お里も小さい頃から家業を手伝う利口な娘であったが、昨年の大水で家財を全て失い、その借金に形に遊郭に売られたのであった。

放空は、河和田村にある觀世寺がんぜじの僧であった。三年ほど前に若狭の寺から、縁あってこの寺にやって来たのである。



放空は僧という立場ではあつたが、お里の純な心に惹かれ、人目を忍んでお里と逢瀬を重ねていた。放空は心の中で、お里が身売りを余儀なくされたのは、仏罰が当たつたのかもしれないと、自分を責めていた。

(何としても、お里を救い出さなければ……。)

夜明け前になり、郭も静まり返つていた。皆の眠りが最も深い頃である。

「お里、行くぞ。」

放空は、お里の顔に泥を塗りつけ、百姓着を着せ、背には籠を背負わせ、あたかも物拾いの姿となつたお里を連れ出した。そして、帳場に詫び料として、金三両の包みを置いていった。

遊郭の門に來ると、門番が一人眠りこけていて、二人には全く気が付かないようであつた。

「お里、走るんだ。」

二人は手を取り合い、無我夢中で走つた。そして白々と夜が明ける頃には、京の町を抜け若狭に通じる峠道に差し掛かつた。

二人は道端に立つ地藏の傍らに、腰を下ろした。地藏には誰が供えたのか、花菖蒲が一輪飾られていた。

「お里、やがて追つ手が来る。このまま二人で逃げていては、必ず捕まる。お里はこの道をまつすぐ行つて、若狭の方に向かうんだ。若狭の三方という所に、『諦応寺』たいおうじという寺がある。観音様が刻み込まれている、銀杏の大木が目印だ。その寺に、私の修行仲間の妙空という尼僧がいる。話は通してあるから、

しばらくその寺でかくまってもらうんだ。私はこのまま、河和田村に戻るが、秋になったら必ず迎えに行く。それまで、待っていてくれ。」

お里は心細そうにうなずき、そのまま顔を上げなかったが、放空に背を押されて、ようやく若狭の方に歩みを進めた。

放空はたどたどしい歩みのお里の後ろ姿をいつまでも見送った。

(無事に着いてくれよ、お里。)

その頃京の郭では、お里が旅の僧と逃げたことが発覚し、すぐに河和田村の方に追っ手をかけた。

放空も、観世寺かんぜじに急いだ。追っ手より先に寺に着かなければならない。お里の無事を祈りながらひたすら走り続け、お昼過ぎには寺に戻り、門を固く閉じた。

一方のお里も無事、お昼前には諦応寺に着き、妙空に事の仔細を告げていた。妙空は、まだ若い尼僧であり、放空とは二年余り一緒に修行を重ね、今回のお里の件を受けたものの、心の中では放空を慕っていた。

妙空は、お里を風呂に入れ替えさせたが、そのお里の姿を見て、妙空は驚いた。まるで髪を下ろす前の自分に、瓜二つであったのだ。そして、叶うことなら自分がお里の代わりに放空と、そんな思いを抱いた。

妙空は、込み上げてくる放空への思いから、道を踏み外してしまった。お里に、

「その姿では、やがて追っ手にばれてしまいます。髪を下ろして、尼僧の姿になりましょう。」

と告げ、お里を説得した。

「大丈夫、姿形だけです。秋には放空様が迎えに来ると言っていましたから、その時までには、髪も伸びるでしょう。」

そして密かに妙空は自分の髪を伸ばし始め、頭巾帽をかぶり、誰にも悟られないように気を張った。そして少しずつ髪が伸び、女らしく変わっていく自分の姿を時折鏡に写し、放空のことを思いながら髪を梳といた。

一方の髪を下ろしたお里は、まるで妙空そっくりであったが、追っ手がいつやってくるやもしれないので、ほとんど寺を出ることはなかった。

「どんどんどんどん。」

観世寺の門の戸を、激しく叩く音がした。追っ手がやって来たのである。数人のならず者らしき男たちが、大声で叫んでいる。

放空は三日三晩息を潜め、男たちがあきらめるのを待った。

「いねえようだ。仕方ねえ、三両で勘弁してやるか。引き上げるぜ。」

男たちの声が聞こえ、放空は安堵した。お里の家にも、何ら危害がなかったようであった。

季節はやがて秋になり、吹く風も日に日に冷たくなっていた。放空は諦たい応おう寺ふみに文を送った。そこには、お里のことを案じる放空の思いと、そしてお里を迎えに行く日時が記されていた。

二日後にその文は諦ふみ応ふみ寺ふみに着いたが、放空からの文と知って、妙空はお里に見せることなく封を開

けた。

迎えの日は、十日後の十月十八日の早朝であった。この日は、若狭・神宮寺の観音祭り、近隣から多くの参詣者がやって来る為、関所の往来も自由であった。

妙空は、待ちに待ったその日の為に、周到に準備を整えた。そして、前日の朝お里に、

「私は明日早朝、神宮寺様の観音祭りにお参りに出かけますので、留守番をお願いしますね。」と告げた。

お里も、放空からの知らせを心待ちにしていたが、この頃はすっかり寺での生活にも馴染み、妙空の代わりに仏事を勤めることができるほどになっており、ある意味どちらが妙空で、どちらがお里か、区別がつかないくらいであった。

いよいよ夜が明け、まだ薄暗い中、妙空は小菊模様の小袖に着替え、長く伸びた髪を結び上げ、うっすらと紅を差し寺を出た。そしてその姿は、まるでお里であった。

妙空は、朝露で足袋が濡れないよう気を配りながら街道筋まで出て、放空を待った。行き交<sup>かう</sup>人は誰もなかった。

その時である。遠くから網代笠<sup>あじろがさ</sup>をかぶった姿が見えた。放空である。気が付いたのか、小走り<sup>かうり</sup>で向かって来ている。

「お里、無事だったか。逢いたかったぞ。」

放空は、妙空をぐっと抱き締めた。しかし放空は、それが妙空だとは知る由もなかった。

二人は若狭を抜け、名田庄の方に向かった。名田庄には、放空の兄弟子の寺があり、今は病に伏しており、とりあえずはその寺に身を寄せるつもりであった。

今妙空は、女としての喜びを感じていた。長い間恋心を抱いていた放空と、やっと結ばれる時がやって来たのである。

名田庄の寺での二人の生活は、穏やかであった。放空は、妙空をいたわり、そして妙空も自分の全てを放空に託した。

しかし、何が災いしたのかその三年後、妙空は流行り病で突然倒れ、もう永くは生きられないことを自ずと悟った。

妙空にとつて放空との三年は、幸せであった。しかし今、自分のことをお里と信じ込み介抱をしてくれる放空に、申し訳ない気持ちで一杯であった。それでも、真実を話すことはできなかった。

奇しくも明日は神宮寺の観音祭り、という夜であった。妙空は静かに息を引き取った。そして、死ぬ間際に妙空は、

「諦応寺へ……。」

とだけ、残された力を振り絞つて、放空に言い残した。

妙空の「諦応寺へ……。」という言葉は、「諦応寺へお里さんを迎えに行つて下さい。」という意味であったが、放空はただ、

「うん、うん、うん。」

とうなずきながら、妙空の手を取った。

そして翌朝放空は、冷たくなつた妙空をおぶつて、諦応寺を訪ねた。

「妙空殿、お里が息を引き取りました。どうかこの寺に葬つてやつて下さい。」

お里はやつと出会えた放空の胸に飛び込み見たかつたが、妙空を背負つたまま涙を浮かべている放空を見て、全ての事情を自分の心の中に封印し、妙空として振舞つた。

その後もお里は、諦応寺に残り、妙空として妙空の菩提ぼだいを弔とむらつた。

そして放空は、

「お里。」

と独りつぶやいて、諦応寺を後にした。その後、放空が諦応寺を訪ねることは二度となかつた。

大正七年十月で十九歳になった小夜は上品な着物をやや裾長に着て背筋をしゃんと伸ばし、わずかに面あげてすっすつと歩く。

その裾さばきの優雅さに加え、すれ違う若い男どもが何度も振り返るほどのみずみずしい美貌であるため、口さがない町内雀が『結城街道はお小夜さんの裾で掃く』と賞賛とやつかみの入り混じった陰口を叩くのも無理からぬことである。

その上、女学生時代には袴に編み上げ靴で男子学生と互角にテニスをするほどの活発な性分でもあったから、化粧つ気もなしで髪振り乱して働くおかみさん達の井戸端会議の標的になるのも仕方ないことで、自分が陰口されていることもうすは知っているが歯牙にもかけない。

小夜は結城紬の間屋の一人娘である。父親は優しいが近在の農家の女房達がコツコツ織つては持ち込む紬にやんわりと難癖をつけては買い叩く、いけ好かない商売上手だが娘には滅法甘くて、習い事にも着飾ることに目も付けない。

そして年明けには自分の店よりもはるかに大店である問屋の跡取り息子の和一との結婚を親同士で取り決めていた。そこには商売上の駆け引きも十分にあつたが、そんなことはそぶりも見せず、結納

が済んでからは始終上機嫌である。

和一是二十一歳になつたばかりで、間延びした顔立ちに気の良さが出ていることだけが取りえのばつとしない男である。

だが、親の財力で孟宗竹の林に囲まれた広い敷地に新婚の家も用意されている分不相应な果報者なのである。

しかし、父親のもくろみとは裏腹に小夜にはひそかに思う人がいた。それは留吉という名の二十三歳になる男で、結城紬の生糸を染める紺屋の使用人である。

もともと、留吉は福井県の鯖江近辺で織られている石田縞という木綿織物の草木染めの染屋のせがれであつたが父親の商売のしくじりの煽りを食らつて出奔し、遠い知合いを頼つて結城に流れて来て紺屋に勤めた男である。

染める材料が生糸と木綿糸の違いこそあれ藍の扱いに大差もなく紺屋の仕事にもすぐ慣れて、今では一目置かれる存在である。

だが、この男を本名で呼ぶ者はなく、ロシヤ留、ロシヤ留と奇妙な呼び方をした。

周りの男達は大方が茶つばい扁平な顔立ちで小柄だが、何の弾みか留吉は蠟石のように白い滑らかな肌にかぎ鼻、その上に二重まぶたのぎよろりとした目をしている。

おまけに毛蟹のように毛むくじやらの腕と脛をした偉丈夫であり、タツタと歩く格好はどうみても日本人離れしている。そこでロシヤ人みたいな顔付きをした留吉でロシヤ留とあだ名が付いたのである。



しかし、手だけは仕事柄黒ずんでいて爪の間には染料が深く食い込んで紫じみていたし、体にはいつも藍の匂いが纏わり付いている。

ここだけが純粹の日本人らしいところで、この不釣合が幸いしてか、取っ付きにくさが消えて、主人はもとより朋輩からも好かれる若者なのである。

小夜がロシヤ留と初めて言葉を交わしたのは、紬組合の寄合の知らせを父親に代わつて受け取つた時であつた。

お茶を飲み干した後、ロシヤ留は言った。

「同じ織物でも俺の故郷の石田縞と、結城紬では機はたの音が違うんですよ」

「あら、そう。結城紬の機の音は、キーツ、チャンチャン！ キーツ、チャンチャン！ って女のヒステリーみたいだけど、石田縞はどんなふうに聞こえるの？」

「バツタンコ、バツタンコって単調でのんびりです。土地の人間の気性も似てるんですよ」

それから何かにかこつけては訪ねて来る度合いが増え、互いに惹かれ合いながらも身分の違いの壁はロシヤ留の胸を締め付け、確かな約束など一言もできずに一年が過ぎた。

小夜は小夜で勝気な割には親に逆らうこともできず、自分から告白することもならず、和一との婚礼準備は着々と進んでいった。

式の日取りが近づくにつれ、小夜の表情は暗くなりどんどん無口になっていった。そして、結城の町の町外れを流れる鬼怒川の橋の欄干に佇んで、舫つてある小舟を見つめながらぼんやりしていると

を近所の人達に見咎められたりした。

婚礼の日は朝から底冷えがして案の定、昼過ぎには雪がちらつき出したが、親戚一同はもとより商売関係の客も雪などは物ともせず盛大を極めた。

和一是あちらの席こちらの席と引き回されて祝いを受け、口角に唾の泡を溜めてさも嬉しそうにもぞもぞと札を繰り返した。

金屏風の前にぼつんと座り、和一の顔を遠く眺めながら小夜は心の中でつぶやいた。

「私はあの人のあの喋り方が嫌い。あの口の端に溜まる白い泡を見るといつも気持ちが悪くなつて顔を背けていたわ。他のことは我慢できるけど、あれだけは嫌！ ああ……」

時間が経つほどに小夜はうな垂れて綿帽子が落ちるのではないかと思うほどであったが、客は花嫁の羞恥心くらいに受け取つて気にも止めず披露宴の馬鹿騒ぎは続いた。

しかし、末席に連なっているロシヤ留だけは祝い膳に箸も付けず、底光りする目で小夜を盗み見しては肩を落としたが、紺屋の使用人を気遣う者など一人も居なかつた。

長い長い宴が終わり客が夜更けの家路につくころには外は一面の銀世界となつた。

強かに飲まされた和一は、寝間に抱え込まれて布団に倒れ込んだまま正体を無くした。

小夜は隣り合つた布団で体も心も強張らせたまま、瞳を見開いて天井を睨み続けた。

とんでもない間違い、取返しが付かない間違いをしたと自分自身を呪いながら。

外は雪が全ての音を吸い尽くしてこそとせず、和一の高軒だけが滑稽なほどに大きく響き、それ

も小夜の後悔をより深くした。

とその時、パーンッ、パーンッと壁を震わすほどの乾いた音がした。

それは、昼から降り出した雪の重みに耐えて撓みに撓つた孟宗竹が耐えきれなくなつて横倒しになる雪折れ竹の破裂音である。

パーンッ！。パーンッ！。

小夜は憑かれたように跳ね起き、隣の部屋に飛び込んで小袖斗の奥から母がこっそり持たせてくれた財布を出して懐深く押し込んだ。

そして、ついさつきまで着ていた打ち掛けを抱きしめて裏口から庭下駄を突っかけて外に滑り出た。

「留吉さんのところに行こう！ 留吉さんのお嫁さんにしてもらおう。このままこの家にいたら私は雪折れ竹になる。心がジャキジャキに裂けて立ち直れなくなる。何も要らない。留吉さんの他は何も要らない！」

家々は寝静まつて明かりひとつ見えない。すぐに下駄の歯に雪が詰まつて転びそうになりながらも無我夢中で路地を擦り抜けて何とか結城街道まで出た。

そこで初めて自分が寝間着姿であること、雪が激しく降り続けていること、素足の体がひどく冷えていることに気付いた。

立ち止まつて抱きしめていた打ち掛けに袖を通し再び歩き出した。打ち掛けは丈が長い上に分厚く綿の入った裾が重たかったが暖かかった。両手で爪が立つほどに襟をつかみ、ズルズルと裾を引いて一歩

また一步と歩いた。

小夜の後ろには小刻みな下駄の跡と打ち掛けの裾の掃き目が残ったがそれもつかの間で、降りしきる雪の下に隠れた。

どれほどの距離を進んだのだろうか。

街道の脇道から黒い影がにじみ出てぐんぐん、ぐんぐん迫って来た。

「あの家に連れ戻されるー！」

小夜は絶望のあまりきつく目を閉じて棒立ちになった。ザクザクと雪を踏む音がピタツと止まり、自分の両肩に手が掛かった時は、恐怖で全身がピクピクと痙攣し、瞑った目にさらに力を込めた。

その時、かすかに藍の匂いを嗅いだような気がした。

「……留吉さん？」

恐る恐る見開いた小夜の目に睫毛に付いた雪がこぼれ落ち、ロシヤ留がじっと自分を見詰めている顔がにじんで映った。

「小夜さん！」

「雪折れ竹、雪折れ竹の音を聞いて決心が付いたの。私と一緒になつて！ お願い」

「俺もそうだよ。あの音を聞いた瞬間、小夜さんを諦めるのは無理だと分かったんだよ」

あふれ出す涙もそのままに二人はきつく抱き合ったまま唇を重ねた。

ロシヤ留は小夜よりはいくらかましな身繕いをしていた。藍で汚れたいつもの紺屋の仕事着に長靴を

履き、なぜか婚礼の席で着ていた紋付の羽織を引つ掛けていた。

ロシヤ留は小夜の後ろ側から髪に付いた雪を丁寧と落としてやった。次いで自分も首を振って雪を払い両手で前髪を掻き上げてから前に回ってくるりと後ろ向きになり、両膝をゆつくりと折りながら優しく言った。

「小夜さん、さあ、おんぶしな」

小夜は広い背中に体を預け、ロシヤ留がゆらゆらと立ち上がって後ろ手と腰に力を込めて大きくひと揺すりして、おんぶの態勢が整うのを夢見心地で待った。それから両腕を打ち掛けの袖から抜き、襟を持ち上げて二人の頭からすっぽりと被り胸元で手首を合わせた。

雪一面の街道で純白の打ち掛けを被った二人は一本の樹氷と化し、いよいよ激しくなった雪の中に溶け込んでいった。

この日を最後に二人の消息はふつりと途絶えた。

鬼怒川の柳が芽吹くころ、舫つておいた小舟が一艘流されたという噂が立ったが、耳をそばだてたのはごく限られた人達であった。



## 「雅代の白い花」

渡辺庸子

その日の雅代はいつそう口数が少なかった。黙って窓際の席に腰かけると膝の上にカバンを置き窓の外を見ている。

僕はカバンをその横に放り投げるように置いた。電車には勤め帰りの人や高校生がまばらに座っている。同じ高校の制服を着た三人の男子が僕らを見た。僕は知らん顔をして座ると足を投げ出した。雅代の横顔を映した窓の向こうを粉雪が斜めに流れていく。

痩せた？ 僕はずり落ちた眼鏡を左手で上げながら、雅代の横顔を盗み見た。ふつくらして赤みがさしていた頬が、皮膚が薄くなったように青ざめている。母親を亡くしたばかりの雅代に、昨日ひどいことを言ってしまった。

雅代はいつも通り英語の単語カードをカバンから出し、カードに眼を落した。それを見たらまた苛立つてきた。気づけば、前の日と同じ言葉を投げつけていた。

「なあ、どうしてもか？ どうしても大学いかんことに決めてしまったんか？」

雅代は顔も上げないで、カードを繰っている。

「こんな大事なこと、僕に相談もせんと、一人で決めてしまつて。……親父さんと二人で鼻パッド作つて、

一生終わるんか。なあ、それでええんか」

兼業農家の次男である僕には、中学から付き合っている雅代の家業のことがよくわかっていなかった。周りに聞こえないように小さな声で、僕はくどくどと言った。雅代は、カードを置き、女の子にしては節の高い手を組みなおして黙っている。ついこの前までは、つまらないことで喧嘩をすると家に帰ってから詫びのメールをして、また深夜に電話で長いこと話した。そんな繰り返しだったのに。雅代が急に遠くへ行ってしまった様に思えた。

「……もう、決めたの。おとうさんを、ひとりにはできないやん」

と前を見て硬い声で言った。そして青のストライプが入った茶色のマフラーを両手であごの上まで引き上げた。

東京の大学に一緒に行こうと、それだけを夢見て、たいして勉強など好きでもなかった僕が、僕なりに頑張つて受験勉強してきたのだ。一人で行くくらいなら僕も大学やめる、と啖呵を切りたかった。だが、それもできなかった。

電車を降りると、雪は止んでいた。雅代の乗るバスの停留所に向かつて並んで歩き出した。諦めきれない僕は、足をとめ最後に投げやりな言葉をぶつけた。

「雅代は、僕といっしょに、東京に行きたくないんやな」

すると、母親を亡くしてから初めて雅代が小さく笑った。聞き分けのない子どもをあやすように言った。「会いたくなったら、すぐに会いに行くから」



僕の顔を、いつものようにまっすぐ見つめて笑っていた。

誰もいない公園の入り口で別れた。バス停はすぐ先だった。

僕は雅代とは逆の方向に歩き出した。ふり返ると、雅代が公園に戻っていくのが見えた。それを僕は他所の家の車庫の陰から見ていた。街灯が白いゴミ箱の前に立つ雅代を照らしている。雅代はカバンを開けた。かがんで中から何かを出して捨てようだった。立ち上がっても、しばらくはその場を離れたいかのように肩を落として佇んでいたが、思い切るように顔を上げると、粉雪がまた舞い始めた中を走り去った。僕はそれを見届けて、公園に走った。ゴミ箱の中をのぞいた。雅代の得意な数学の問題集が大きく裂かれ、執拗に細かく破られていた。さつきまで指で練っていた単語カードがその間にばらばらになって紛れ込んでいた。手を伸ばした。いちまい、いちまい拾い集めた。一瞬それを自分のカバンに入れて持ち帰ろうと思ったが、やめた。大きく息を吐くと力まかせにゴミ箱に投げ捨てた。怒りと悲しみが込み上げてくる。

舞い落ちた雪片がかさなり、捨てられた紙を濡らしていった。

雅代は、進学をあきらめ、母親が残した家事一切と仕事を引き継いだ。

会いに行くからと言ったのに、結局一度も東京には来なかった。

僕も都会の暮らしや大学にも慣れ、雅代のこととは忘れていた、はずだった。

大学三年の冬だった。友人とその彼女が僕の部屋に遊びにきた。三人で飲んだ。二人は二人だけに通じることばと特別な眼差しを交わし、腕や肩に触れ、時折それぞれが僕に気を使って話しかけた。

幸せな二人が帰り一人取り残された部屋は、温もりも同時に消え、急に寒々としてがらんとしていた。ビールが転がり、テーブルに酒がこぼれている。

深夜、スマホを手にすると衝動的に指が動いた。

——雅代、今すぐ会いたい。雅代を抱きしめたい。すぐに来てくれないなら、オレ、もうそっちに帰らんから——

前置きも何もなく、それだけをメールしていた。

その時、故郷に帰るあても東京に残ることも何も決めていたわけではなかったのに。八つ当たりのように送信してしまった。夜が明けても雅代からの返信はなかった。

それでも僕は大学を卒業すると故郷の眼鏡メーカーに就職した。やはり真つ先に雅代に謝ろう、帰る北陸線の電車で揺られながら、それだけを考えていたような気がする。だが、いざとなると詫びの言葉どころか連絡することもできないまま日が過ぎていた。

ところが空からの贈り物のように、晴れた日の昼下がりに街中で雅代を見かけた。高校卒業以来五年ぶりだった。ベージュのシャツにブルージーンズという恰好で、連れもなく、速足で駅前のコンビニの角を曲がついていった。颯爽としてみえた。長かった髪はショートにして、白い耳朶が覗いていた。

その夜、思い切って電話をした。雅代は留守だった。鯖江に戻りましたので挨拶に伺いたいという僕に親父さんは、ああ、とだけいうとすぐに電話を切ってしまった。

雅代の家に向かう道の両側には、のどかな陽ざしを浴びた躑躅が満開だった。車が一台通れるだけ

の細い道を曲がった突き当りが、高校の頃に何度も遊びに来た雅代の家である。

敷地の奥に屋根瓦が白く光っている平屋、その横に見慣れた作業場があった。車の音を聞きつけてか、親父さんは、すぐに家から出てきた。作業場の戸を開けると、顎で中に入るように促した。足を踏み入れると、後ろで戸を閉める音がした。

雅代の姿は見えない。明る以外の光は中まで届いていなかった。しんとしていた。今の今までそこで雅代が張り詰めた作業をしていたかのような緊張した気配があった。鯖江の眼鏡作りは、古くから分業とされてきた。雅代の家では、鼻パッド一筋がなりわいだ。アセテート生地を切断し、五十種類以上の金型で型を抜き、熱を加えて立体的に仕上げ、それを右用左用にカットする。すべてが手作業の世界だ。親父さんが、小学生の雅代に話してくれたという、雅代の一番お気に入りの話を思い出した。無口な親父さんに似た雅代が、この話の時だけは饒舌だった。

——メガネの中で、最もひかえめで慎ましいのが鼻パッドなんや。誰からも特に注目されるつてわけのものじゃないが、大事な役目を、ひそかに果たしているんや——つて、おとうさん、カツコいいこと言ったんやよ。

奥の壁に向かって横長の作業机があった。長い間使われ馴染んだ落ち着きを見せ、机の上はさつぱりと片付いていた。親父さんが手を伸ばした。卓上の電気スタンドが青い光を放った。机の隅に隠れていたように、小さな布袋があらわれた。僕の方を振り向くと、黙り込んでいた親父さんは、ようやく口をひらいた。

「雅代が今朝、修ちゃんに渡してほしいうて、置いていったもんや」

雅代は役所に出かけていて、もうそろそろ帰ってくるはずだと、つけくわえて言った。

藍色の縞模様様の袋には眼鏡ケースが入っていた。

恐る恐る開けた。深緑と若草色のリバーシブルメガネだった。

「二年もかかって、やっと出来上がった眼鏡や。特別にデザインも、雅代がしたんやと」

親父さんは、それだけ言ううと、また丸い背中で両手を組み黙って作業場を出て行った。

窓の外に、白い花が咲いていた。名前は忘れたが、雅代の好きな花だった。

机の前の壁にかけてある四角い鏡に向かつて立った。眼鏡を両手でそと持ち、かけてみる。鼻パッドがやさしくとまる。目の奥がジンと熱くなった。雅代が見てくれていた僕の顔が、鏡に映っている。

ケースを手にとると、眼鏡拭きの下から二つに折りたたんだ手紙が見えた。

広げると、雅代の几帳面な字で、おかえりなさい、とあった。

外で自転車を停める音がした。聞きなれた雅代の靴音が近づいてくる。

## 「千姫の初恋」

西村一江

千姫は侍の背で目を閉じていた。鎧が頬にあたってひんやりと冷たい。硝煙が漂う闇の中を侍が大股に足を踏み出すたび、負ぶわれている身体が上下に揺れた。無造作に束ねられた侍の髪から、汗の臭いが漂ってくる。

大阪城が落城し、落ち延びた千姫一行を東軍兵士が取り囲んだ。東軍陣地に案内してくれるのかと思いきや、あろうことか千姫救出の功を奪い合い味方同士殺し合いを始めた。配下の者も殺され危うくなった千姫の身を助けてくれたのが、この侍だった。我が身が負ぶさっているこの男が怖くないわけではないが、信頼するしかない。

侍は突然足を止めた。しばらく耳を凝らした後、背中から千姫を降ろす。やはり、この侍も所詮ただの男であつたか。千姫は懐剣に手をやり身構えた。いきなり、侍は身を翻して刀を抜き何者かを斬り倒した。更に一人、そしてもう一人、恐ろしいうめき声をあげて倒れた。侍は抜き身の刀を握ったまま大きく肩で息をしていたが、やがて道を逸れて山肌を下の方に降りていた。しばらくして千姫の耳に水音が聞こえてきた。川で返り血を落としているのだ……千姫は背筋に悪寒が走るのを感じた。自分を助けてくれたのだとわかつていても、動物的な猛々しさを目の当たりにして恐怖が沸き上がった。

侍が戻つて来た。そして、何事もなかったかのように腰を落とし、千姫に背中を向けた。千姫は他にどうしようもなく、侍に負ぶさった。ふっと、丁子の香が匂った。

半時ほど歩いた頃、侍は一本の大きな木の根元に千姫を降ろした。

「ここで夜明けまで待つて、東軍の陣地にお送りします。先ほどのように、夜陰の勝兵は狼藉を働きます故。」

侍の声は、太く低く、落ち着いていた。そのことが千姫を安堵させ、気になっていた問いを促した。

「どんな気持ちなのじゃ、人を斬るといふのは。」

しばらくの沈黙の後、侍が答えた。

「私は、気持ちを無にします。そうでなければ、人は斬れません。」

「無……か……。」

「はい……、子供のころ母から聞いた話ですが、私の郷里の越前国鯖江にある長泉寺を朝倉勢が橋を壊して守ろうとしたところ、織田勢は道ばたの石地藏様を川に投げこんでそれを橋にして攻め込んだそうです。つくづく侍は嫌だと思いました。……とはいえ、結局侍になつてしまいましたが……。」

千姫は、自分の前に片膝をついている侍に目をやった。雲間から出た月明かりが、優しげな目元と引き締まった口もとを照らし出した。千姫は驚いた。ひげ面の年を取った荒武者だとばかり思っていたのだ。自分と、そんなに年は違わないのではないか。

侍が、竹筒を差し出した。

「どうぞ。先ほど酌んだものですからご安心ください。」

水は、冷たく甘かった。侍は、千姫から少し離れて木の根本に座り目を閉じた。

「ああ、虫の音が聞こえまするな。」

千姫は耳を澄ませた。薄闇から聞こえてくる穏やかな虫の音は、銃弾の炸裂音や砲弾の轟音、人々の叫び声やうめき声に疲弊した神経を、優しく撫でてくれるように感じられた。

心がほつと綻んだ。ここ数日間続いていた極度の緊張から、解き放たれる気分だ。

千姫は、侍と話がしたくなった。

「そなた、名はなんと申す。」

「瀬川正三郎と申します。」

「歳は幾つじゃ。」

「二十一です。」

「二十一……、嫁御はおるのか。」

「いいえ、私は独り身です。三男ですから、養子の口でもなければ嫁は持てません。」

「そうなのか……。」

「十七の歳から、戦が起きる毎に雇われ兵として生きてきました。この度も、東軍の兵求募に応じたのです。」

「母御はご心配であらう。」

「母は三年前に亡くなっております。生前、郷里産の絹地で匂い袋を作りお守りとして持たせてくれました。」

侍は懐から匂い袋を取り出した。月が翳つたため絹地の色は分らないが、甘くかぐわしい丁子の香りが辺りに広がった。

「母御の形見か……。良い香りじゃ。」

侍はしばらく匂い袋をじつと見つめ、再び懐に入れた。

千姫は夜空を見上げた。星が美しかった。空とはこんなにも広いものであったか。ふと、大阪城の天守閣から見たお堀のホタルの乱舞を思い出した。外堀と内堀、二重のお堀の上を幾千いや幾万という青白い光が舞い踊る様は、この世のものとは思われぬほど美しかった。もつとも、お堀が埋められてからは、見る事が出来なくなてしまったが。

「そなたの郷里でも、ホタルは見れるか。」

「はい、清流がございますから。夜、雨戸を開けたまま寝ておりますとよくホタルが部屋に入ってきました。そのぼうつとした光の点滅を、眺めながら眠るのが好きでした。ですが、朝起きて部屋にホタルの死骸が落ちているのを見るのは辛うございました。なぜ、外に出ていかなかったのかと口惜しゅうございました。」

侍の話は千姫の胸を突いた。戦で身を立って人を斬ることを生業としている者が、小さなホタルの死を悼むとは……。衝撃は、甘く温かな感情を呼び起こした。初めての感情だ。



七歳で輿入れし、夫の秀頼とは従兄妹同士。閨を共にしたのも数えるほどしかなく、夫には複数の側室がいた。夫婦の愛情も生じなかつた。徳川家康の孫である自分は、城中で囁かれていた通り人質でしかなかつた。

千姫は、傍らの侍を見やつた。逞しく、優しさを兼ね備えた若者。自分はまだ十八だ。

これから先、この若者と生きていけたら……。唐突な熱い思いが、一気に胸にこみ上げてきた。もはや囚われの身ではないのだ。初めて、自分の意志が生まれた。だが、この想いをどう伝えればいいのかわからない。千姫はただ、若者を一心に見つめた。淡い月明かりの下では、その横顔は紫色の薄闇に包まれてよく見えない。その時、ふっと小さな灯がともし、筋の通つた高い鼻が一瞬浮かび上がった。そしてまた、浮遊するはかなげな灯がともし、男らしい顎の線を照らし出して、消えた。

「ホタルが、出て来ましたな。」

明滅する青白い灯は、何度も何度も、若者の顔の陰影を闇に浮かび上がらせては、消えた。

白い靄が辺りを漂い始め、夜明けがやつてきた。

目の前に、若者の背中があつた。千姫は負ぶさり、首筋に顔を寄せた。

「わらわを連れて行つてたもれ、そなたの郷里に……。」

かすれた小さな声が、千姫の口から漏れた。

「はっ……、なんと……。」

「正三郎殿……、わらわを、そなたの嫁にしてたもれ。」

若者は、歩き出した、昨夜のように大股で。黙ったままで。

千姫の涙が若者の首筋をぬらした。若者は、まっすぐ前を向いて歩き続けた。

東軍陣地に着いた。津和野藩主坂崎直盛の陣地だった。若者は大声で告げた。

「正二位豊臣秀頼公御正室千姫様であらせられる。陣を開けられよ。」

大喜びする藩主に千姫を託し、辞そうとする若者を必死の声が呼び止めた。

「正二郎殿……。」

言葉が続かない。これが今生の別れであつても、せめて若者の気持ちを知りたかった。

若者は懐に手を入れ何かを取り出し、顔を伏せたまま千姫の前に差し出した。

「千姫様の落とし物にございます。」

それは、淡い桜色の匂い袋だった。若者の母の形見だ。千姫の心が喜びで満たされた。

匂い袋を受け取る時に触れた若者の手の平は、燃えるように熱かった。この先、自分はこれで生きて

いける。丁子の香に包まれて、千姫はそう思った。

## 「銀の花かんざし」

鷺田恒郎

三国の湊から川舟を引いて日野川を十日掛りで上つてきた船頭と川人足たちは、白鬼女の渡し場の直前で、一つのあどけない異変に気づいた。川音に交じつて仔猫がじゃれるような声が聞こえ、舟荷の筵をはがすとヨダレだらけの赤ん坊が全身で無邪気に笑っていた。真白い襦袢の包みには藤の花びらが枝垂れる『銀の花簪』が置かれ、きらめく川波のさんざめきにしゃらしやらと鳴りながら微細な光と影を捨子の顔の上に遊ばせていた。それを懐に隠そうとした川人足を「埒も無えことをするんじゃねえ」と船頭が叱った。

古利・誠 照寺の長い長い築地塀に影が弾み、幼い二人の子が駆けている。年下の男児がやつと追いついたのを待つて女兒は笑いかけた。

「結うはね、参チャンの花嫁サンになるんだよ。お父つつあんが決めたの。だからね、参チャンのあのキラキラの『銀の花かんざし』をさして、結うはね、参ちゃんの花嫁さんに、なるんだ、からあー」と声を上げて、結うは今度は町屋の並ぶ北陸道へと駆け出した。

川舟の捨子を引き取つたの間部藩鯖江入部以来の老舗、上総屋夫婦だった。四代目得五門は前年妻を失い、残された乳呑児の結うのために後添えにじゅうを迎えていた。夫婦は捨子に『仏縁』を覚え、

参吉と名づけて一つ上の結うと隔てなく育てた。じゅうは病がちな得三門の代りに上総屋を切り盛りし、結うと参吉の貰い乳も苦にしなかった。

—上総屋の四代目は、巴御前さんや。

鯖江の町スズメ達は柔和ながらも腰のすわったじゅうをそう評した。結うが十歳の年、得三門は病没した。参吉と夫婦めおとになつて上総屋を継げとの遺言だった。姉と弟はじゅうの手でしっかりと躰けられながら成長したが、

—りっぱなおつ母さんで、息が詰まりそう。

結うがぼつりとそう洩らしたこともあった。

夏の濃い朝霧が地面から白く湧いていた。

《嫁にゆくまいー 漆掻きサンの嫁にー》

しみ透るような声で地唄を低く歌いながら、結うは参吉と店の前の北陸道を掃いていた。ひたひたと朝霧の雫を踏んでくる足音が二人の耳に届いた。結うはくると振り返った。

「上総屋さんだね、ここは」霧の中につるりとした若い男の笑顔がうかんだ。一瞬息をのんだが、結うは白い歯を見せて明るく応えた。

「はいっ。ウチにご用なんですわね」

娘さん、アンタいい声のどしてるねえー、と男は笑いながら店先の縁台に腰をおろして、

「遠縁の江戸駿河屋の三男、竜芳だ。厄介かけます、と女将さんに伝えてくんねえかな」

店の中に入っていく結うの姿を竜芳は好まじげに視線で追って、立っている参吉に

「いいネエ、あの娘。名前は」と顔を向けた。

「姉の結うです。わたしは、弟の参吉です」

へえー、似ない姉きょうだい弟あにいだねえー、と竜芳は首をすくめて見せ、陽気な笑い声を立てた。

竜芳の来訪を文で知らせたじゆうに、迷惑をかけるが、鯖江でしばらく真面目に仕事をさせてくれまいか、との駿河屋の返信が来たのは初秋だった。その頃には三人の若者はすっかり打ち解けていた。

竜芳の語る江戸の話は面白かった。百万の都会まちの役者や相撲取り、若い男女の心中話。華やかな江戸の話に、結うと参吉は時を忘れてしまうこともあった。

薄暗がりの中、額を血に染めて竜芳が帰って来たのは秋の半ばの事だった。その夜おそく、庭先で参吉を呼ぶ結うの小さな声がした。

「参ちゃん。竜芳さんが博打の喧嘩いざなで鯖江から逃げなくちゃならない、つて言うの……」

そう言つて息を詰め、強い瞳で参吉を見た。

「竜芳さんが私に、一緒に江戸に行こうつて。私は、お父つつあんが決めてくれた通り、参ちゃんのお嫁さんになる。けどこの鯖江じゃダメ。立派すぎるおっ母さんの掌の上から一生出られないで、きつと他人ひとの人生ひとみたいに生きてしまう。それが嫌なの。ね、参ちゃん、一緒に行こう。江戸で、二人で暮くそう」

参吉の総身を喜びがひたした。百万の都会、江戸。その片隅で結うと二人で所帯を持てる。吐息が洩れ出しそんなほどの幸せだった。

だが、それは――じゅうへの裏切りだ。それは――下卑た人間に成り下がる事だ。塵か芥の根性で、江戸の風に胸張つて生きられるのか。

「できない、お結うちゃん。俺は捨子だ。無理だよ……それは」参吉はかぶりを振った。

「うん、解つてる。けど、真つ白な所で、私は参ちゃんと、一から始めたい……」結うは両唇を強く噛んだ。そして次の声を低くした。

「夜の内に、竜芳さんと白鬼女の渡しに行つて、待つてるから。だから、ね、参ちゃんは後から来て。ね、一緒に舟で江戸に行こう」

小走りで遠ざかる結うの細い後ろ姿がぼんやりとした暗闇に溶けて行つた。

白鬼女の渡し場が遠く小さく見える。川波が昼下がりの陽ざしに碎けながら流れている。参吉は半日も、ひとりかがみ続けていた。

夜明け前、参吉は結うに追いついた。

何も云わずに手の包みを広げ、結うの前に『銀の花簪』はなかんざしを取り出した。驚いて結うは参吉を見つめた。涙が眼いっぱい溢れた。参吉は結うの髪をそつとおさえ、花簪はなかんざしを挿さした。

「おつ母さんを裏切つて江戸に、今は行けない。一生懸命おつ母さんに尽くして、五年先か十年先か……必ず許しを貰つて江戸へ行く、必ず行く。お結うちゃん、待つてくれ」

結うは静かにうなづいて淡くほほ笑んだ。

「駿河屋さんで下働きして、私は参ちゃんが江戸に来るのを待つてる。お婆ちゃんになつても、待つてる。参ちゃん、それでもいい？」

「ああ、ああ」と参吉は大きな声で頷いた。

陽が高く上がり、荷を満載した川船が列を作つて渡し場を離れた。座れとうながす竜芳の手を払つて、結うはしんがりの船の艫かほに立ち続けていた。髪の花簪はなかんざしを川波の反射光が打ち、夥おびただしい銀の花びらがきらきらと騒いだ。参吉を見つめ続ける結うの姿が揺れながら小さくなっていく。身体の半分がもがれたようだ。心細く、ひたひたと悲しい……。

やがて陽が翳かげり、雨が走った。薄ねずみ色に波立つ川縁りにのめるように参吉はうずくまったままだった。十六の今まで、結うが、いつも隣にいたのだ。一度だつて、離れたことはなかった……。体を叩きつつける雨がふつと止まったのに参吉は気づいた。傘が差しかけられ、参吉の横にじゆうが立っていた。

「私の娘は、行つてしまったんだね、参吉……」

「おつ母さん、おれをいつか、江戸に行かせてください。おつ母さんの許しが出る迄、上総屋のために……身を粉にして働きます」

「お父つつあんが見込んだ律儀な気性は変わらないねえ。でも参吉、江戸で暮らすのを私は許さないよ」だが、その眼は笑っていた。

「親の遺言は破れないよ。ただ、結うの江戸の苦労も三年したら、必ず実みになる。三年後、私は隠居し

て、鯖江を出る。その時、参吉は江戸に結うを迎えに行く。そして遺言通り、お前たち夫婦二人で、上総屋をやるんだよ」

慈しみが参吉の濡れた体をくるんでいた。

駿河屋のある芝高輪が大火に遭ったのは三年目の夏だった。駆けつけた参吉の前に焼け野原が広がり、結うは見つからなかった。そのちも結うの消息は全くつかめなかった。

上総屋得子門はひとり身の夕膳を静かに終え、縁で夕空を見上げていた。店の表の方から沁みいるように澄んだ唄声が細く流れて来る。

《嫁にゆくまい、漆掻きサンの嫁に

ながの夏中を・・・》

結うが口ずさんだ、あの地唄の節だった。転げるように得子門は北陸道に飛び出した。店先で門付けする少女がいる。結うの面差しに似たその少女の髪に、あの日結うに挿した『銀の花簪』があった。数知れぬ銀の花びらが西陽に揺れながら茜色の光を返していた。三味線を鳴らしていた男が手を止め、火傷で片眼がつぶれた顔をゆらりと得子門に向けた。

「十六年ぶりです。竜芳ですよ、参吉さん」その夜、得子門は結うのたどった半生を知った。結うは駿河屋に奉公し、参吉を待っていたが、すっかり真面目になった竜芳にある夜呼び出され、意外な言葉  
を聞かされた。



「賭場の喧嘩は狂言さ。江戸であんたと一緒になりたくて……」深く腰を折って竜芳は頭を下げ、「言えた義理ではないが」と継いだ。

「もしも、五年経つても参吉が来なかつたら、諦めてオレの……嫁になつてくれないか」

「渡し場で、私は銀の花簪の花嫁になつたの」

結うは竜芳に頬笑み、静かに首を振った。

その夏、駿河屋は大火で燃え、結うは炎に巻かれた。燃えさかる火の中で竜芳は結うを救つたが、重い火傷を全身に負つた。

「鯖江に帰れ」と苦しい床から竜芳は呟いた。

「助かった命を私が一緒に使うのは、竜芳さんだもの」結うは竜芳に笑みを向けながら、自分を探し回る参吉の姿を想つた。竜芳を荷車に乗せて結うは江戸を離れ、参吉から消息を断つた。数年ののち、結うは竜芳と所帯を持ち、娘のりんを生んだ。体の不自由な竜芳の三味線に合わせ、結うとりんが歌う旅が三人の暮しとなつた。りんが九歳になつた去年の冬、結うは流行り風邪に罹り、臥せつた。

「あの花簪をりんの髪に挿して、あつという間に亡くなつた」頭を垂れ、竜芳は落涙した。

「オレの嘘が、皆を不幸にしまつた……」

翌朝、竜芳の姿はなかつた。北陸道に人を出して探したが、見つからなかつた。残されたりんは、五代目上総屋得工門の娘となつた。

飢饉が相次ぎ、白鬼女の渡しに多くの児が捨てられた。得工門はりんに婿を取つて隠居すると、日

野川に小屋を建てて捨子たちと暮らし、養育しながら老いた。晩年は丈四尺の観音像を彫ったが、合掌する観音の手にはほそいすき間があった。得玄門の死後、りんが結うの形見の『銀の花簪』はなかんざしをそこに挿すとぴたりと嵌った。はまりんは小屋跡にお堂を建て観音像を安置した。『かんざし観音堂』と人々に呼ばれたが、何度目かの日野川の氾濫で流されて、今は跡形もない。

## 「季節を過ぎた公園で」

井原敏貴

江川宏志が新橋で眼鏡屋を始めて十年になる。売上にも多少の波はあるものの、最近は馴染の客も増え、開店時に借りた銀行からの返済も終え、少し余裕が出て来たとも思う。

そのせいかフレームに合せて切り抜かれたレンズをはめ込み、客の顔かたちに合わせてフレームの曲がりを変えるだけのそうした仕事に物足りなさを感じてきた。

妻には先立たれたが、子供達は独立し、今の生活に不満はないといえるのだが、何かを作り出すよくな、自分にしか出来ないことをしたいと思い、鯖江から毎月のようにやって来るフレームの卸業者に、世間話の中でそうしたことを打ち明けたところ、鯖江では素人がフレーム作りを体験できる工房があると教えてくれた。

問い合わせると、その月の末にまだ空があるとのことだった。江川は店のガラスに「一緒に鯖江でフレーム作りを体験しませんか」と張り紙を出した。

彼は面白そうと思える事は、なんでも周りの人間を誘うのが性分だが、急な誘いに応じる者はなく、彼は一人で鯖江に向かった。

鯖江には以前に一度だけ行ったことがある。学生時代その頃付き合っていた彼女と旅の途中に西山

公園という、つつじの名所に立ち寄ったのだ。その時のつつじは満開で綺麗だったことを思い出すとその彼女のことも思い出していた。

鯖江に着き、教えられた工房に行くと、講習を受けに来た客は既に揃っていた。東京から来た者は江川の外に、自分の娘と違わないと思える齢の女性だけだった。他の者達は関西からの知り合い同士のように、自然と江川はその霞という女性と話をするようになった。

「何かこうしたものを作りたいといったものはお有りですか？」

講師がそう告げると、霞は昔オードリー・ヘップバーンが『ティファニーで朝食を』でかけていたような、大きな縁取りのサングラスのデザイン画と図面をひろげた。

「これはご自分用ですか？」江川は脇から霞に訊ねた。

「いいえ、母の為に。昔の母の写真から考えたものです」と恥じらうように笑みを浮かべた。

霞は講師の指示に従い、器用に作業を進めていた。江川はその手先に見入るほどだったが、自身は改めて己の不器用さを思い知らされる体験となっていた。

眼鏡フレームの制作も終わろうとする頃、江川は霞に

「よろしかったらこれから西山公園という処へ行ってみませんか？つつじの見ごろは過ぎてしまったようですが」と声を掛けた。

「わたしも行ってみたいと思っていたところです。ぜひ御一緒させてください」と霞は心づもりがあった

かのようにこたえた。

歳が親子ほど違う女性に、そうした声を自然に掛けられるとは江川も不思議だった。仕事柄若い女性客に接することもあるが、これまで店主と客以上の会話はしたことはない。どこか親しげな雰囲気や彼女が発していたのかも知れない。

陽も暮れかけて日中の暑さも収まり、爽やかな季節だった。

座っていた時には小柄に思えた霞は、一緒に並んで歩けば江川と同じかそれ以上の背の高さだ。つまり脚の長さが江川よりもかなり長いと思うしかないが、彼女が調節してくれているのか、同じ歩幅でゆつくりと公園の中を歩いた。

「昔学生の頃、彼女と一緒にこの公園に来た事があります。その時はつつじが満開でとても見事だった」

江川は若い女性にどのような話をしていいかもわからず、自分の昔話をしていった。

「綺麗でしょうね、満開の時期は。今は見ごろを過ぎているのでしようが、まだ咲き残っている花もありますよ。その時に一緒にこられた女性は今の奥様ですか？」霞は江川を上から覗くようなかたちで、その緑がかつた黒い瞳を見開いて訊ねた。

「女房は五年前に亡くなりました。でもその時一緒にこゝへ来た女性は女房ではなかった」

その言葉が江川の心のどこかで封をしていたはずの門をはずし、思い出が湧き出るかのように、溢れ

てきた。

「ではその方とは結婚するつもりはなかったのですか？」

「どうなんだろう、昔のことで」記憶を再び閉じるように口籠る江川は、少しの間を置き、言い直した。

「いや、結婚しなかった。彼女は、どうだったかはわかりませんが」

始めこそしっかりしていた言葉も、終わりになるにつれ声は小さくなった。

霞はその言葉に江川の方を向くこともなく前を見つめたまま

「多分その女性も同じ思いだったのではないでしょうか」と断定するように言った後、「その方のお名前はなんとおっしゃられたのですか？」と尋ねた。

「美佐子です。だけどどうして？」

「ただ何となく」

そういつて微笑む霞の横顔が美佐子の面影と重なっていた。

「そういうえは、貴方と美佐子はどこか似ている気がする。顔かたちも背の高さも違うけれど、何故かあの時と同じ空気の中にいるような……よくわからないな」

江川は自分に話していた。霞はそれを聞いていないかのように、目を閉じ、深呼吸をしていた。

「いいところですね、この公園。満開の頃は勿論綺麗でしょうが、散つたいまでも想像できます。満開のつじと、お二人の姿が」

「僕はあるのころなにもかも自信が無かった。いまでもあるとはいえないけれど、もっと何の自信もなかつ

た。将来に対しても、彼女に対しても」江川も霞の話聞いていないかのように、だれに言うともなく話していた。

「いつの間にか彼女と連絡が取れなくなつた。その少し前お父さんが亡くなつたと沈んではいたけれど、僕たちは変わらないと思つていた。僕が無神経だつたのだからかとか色々考えた。何も解らぬまま、それ以来彼女とは会えなかつた」

「それで結婚を申し込めなかつた？」

「そうだと思う。でも彼女も結婚して幸せにしているだろう」

「もしそうでないなら、いまでも申しこめます？」

「そうでないって？お一人で暮らされているとか？

いやだめだな、こんな髪の毛も薄くなつた眼鏡屋の親父では……いまでも何も言えないだろうな」

「そうですか？その方はその時の貴方の気持ちを、いまでも聞きたいと思つているかもしれませんよ」

「なんでこんな話になつたんだろう。この公園のせいかな」

江川は込み上げてくる感情に戸惑い、話題をかえようとした。

「そういうえばあの眼鏡はお母様の為にといつていましたよね。喜んでくれるといいですね」

「ええ、きつと喜んでくれると思います。もうほとんど目は見えなくなつていますけれど」

「そうでしたか、それであんな濃い色のレンズにしたんですね。でもお元気なんでしょう？」

「あと数か月は大丈夫だと思います。末期がんです。でも全然苦しんだりすることはない、わたしに昔

の話をしたりしています。

その母が話してくれました。昔お付き合っていた方と一度この西山公園を散歩したことが有ると。それでわたしもどんなところか一度来てみたかったです」

江川はその母親の名を聞きたいと思う気持ちを、胸に留めた。

「母もその方と結婚出来たらと思つていたらしいのですが、何も仰つてもらえず、その内に父が倒れ、家が傾いて……仕方なしに地元の有力者の息子さんと、つまりわたしの父ですけれど、お見合いするしかなかったといつていました」

そこまで話すと二人はしばらく無言のまま歩いた。彼女の靴の音が、以前聞いた事があるように思えた。足元を見れば、美佐子の癖だった、バレリーナのように後ろ足の指先を一度外に開いて足を前に出す歩き方をしていた。

江川の心臓がこれ以上は先へ進めないという信号を足に送り、足は歩みを止めた。霞もそれに気付いて足を止め、振り返った。

「もうすぐ公園の出口です。その先に駅があります。ここでお別れしましょう。僕はもう少しここにいます。……今日はどうもありがとうございます。久しぶりに楽しかったです」

江川が息を整え直してそこまでいうと、霞も全てを理解できたかのような、あるいは目許を見られたくないかのような、やさしく丁寧なお辞儀と共に

「こちらこそありがとうございます。母にいいお土産が出来ました」と礼をいった。



膝に手を置きマラソンを走り終えた走者のような格好で、お辞儀をしていた江川が頭を上げたとき、すでに霞の姿は見えなかった。

## 「恋は柔らかに」

松尾智恵子

お天気は悪くなかった。ミチは空を仰ぎ見、湿り気を帯びた地面を見、鬱蒼と広がる周囲の木々を見やった。

道に迷うなど、ちよつとどうかしていたのかも知れない。おまけに太い木の根に足を取られ、転ぶまいと踏ん張ったものだから嫌な感じに足首をひねってしまった。全く動けないわけではないが、頂上付近から下りるとなると自信がない。

これはほぼ遭難といつていいのではないだろうか。ミチはため息を吐いた。それでもどこか落ち着いていられたのは、この山が標高六〇〇メートル程度の山だからだ。こんな山で死ぬことはないだろうし、いざとなればスマホで助けを呼べばいいと足首をさすりながら気楽に思っていた。けれど鼻歌を歌っていたのも、スマホを取り出そうとリュックのあちこちを探し、出がけに友だちと電話してそのままテールに置き忘れたことを思い出すまでだった。助けを呼べないと思った途端、フツフツと不安が湧き上がる。

ミチは痛む足を引きずり、しばらく歩き回ったが、登山道にどうしても戻ることができない。雨の予報は出ていなかったけれど厚い雲が空を覆い始め、一気に周囲が薄暗くなる。そうなると余計に寂し

さが増す。鳥の声もなく、風に揺れる葉音ばかりが耳に騒ぎ、雨雲のように広がる不安にミチは思わず座り込んでしまった。そうなるのと疲れがどっと溢れ出し、寒さまでもが体にしみて来る。声を出してみた。こうなれば恥も外聞もなく、助けを呼び寄せるしかない。声を限りに叫んだ。返ってきたのはさらに力を増した風の音だけだった。どこかで鳥が長い一声を上げる。

「どうしました」

ミチは思わず悲鳴を上げ、腰を浮かした。振り返ると、斜面から飛び出している大岩の上から覗く顔があった。丸顔に肩までの髪、色白で細い目に幅の狭い黒縁眼鏡、すっとした鼻に小さな口。パツと見、草食系の柔な男子に見えたが、今のこの状況では熊以外なら何でも大歓迎だ。ミチは泣きそうになりながらも、迷った上に足を痛めたと声を震わせた。男はさっと斜面を下りてミチの側まで来ると、足首が折れていないか確認してくれた。

「ここは登山道からずい分外れているから、この足で戻るのは難しいかも」

どうしようというミチの泣き顔に、男は素早く携帯を取り出し、助けを呼びましょうといった。てきぱきと救急に連絡を取るとミチの隣に座り、少し時間がかかるかも知れないけどもう大丈夫とにっこり笑った。助けが来るまで一緒にいてくれるつもりらしい。

男は大学生で、沢渡真人といった。名前まで恰好いいとミチは思った。

映画にあるように、緊迫した状況下や非日常の場所で男女が出会々と、恋に落ちやすいと聞いたことがある。思わぬ災難のなか、助けに現れた男性は冷静に見ればミチのタイプではないのだけど、特別

な状況下では五割増しに見えるし、またそういつた好みを超越したものがある。真人は涙と泥で汚れているミチの顔をそっとハンカチで拭ってくれた。

じつと見つめられ、ミチは尋常でない跳ね上がり方をする心臓に気分が悪くなるほどだった。ダメダメとミチは心のなかで首を振り、気を引き締める。非日常の状況で生まれた恋は、下界に戻ればたちまち壊れるというのも有名な話だ。

ミチは歯を食いしばるように真人に傾いて行きそうになる心を押し留める。そんな思いつめた様子に、真人はリュックのなかをかき回してなにかを差し出してきた。

うん？ と見つめる真人の掌にはビニールの包み紙がひとつ。どうもお菓子かなにかのようだ。真人の顔を見ると、「堅いクッキーみたいなもの。結構いけるから食べてごらんよ。お腹すいているんだろ？」と笑う。ミチは顔が赤くなるのがわかりさつと目を伏せる。

危ない恋に踏み出しそうになる自分を制御している様をお腹がすいていると勘違いされたのが情けなくて、また涙が出そうになる。真人が袋を開け、中身を取り出す。眼鏡の形をしたクッキーみたいだ。「眼鏡堅パン。この辺の山に登るときは必ず鯖江に寄って、これを仕入れてから行くんだ。半端ない堅さだけど、口のなかで柔らかくなるまで頬張っているとなんともしえさずまい。非常食にはもってこいだし」

真人は堅パンを見て、今の君の目には僕はどんな風に見えているのかなと呟く。

「え。そ、それは……カッコいい、正義の味方」

ミチは自分の貧相なユーモアのセンスを呪う。けれど真人はハハと笑ってくれた。

「そうか、凄いな。でもこうして眼鏡を通してみると」といつて眼鏡堅パンをミチの両目に被さるように掲げた。「ほら、僕はただの三流の大学の学生で、お金持ちでもなく彼女もなく、休みの日に一人で山に登るしか趣味のない、ただの淋しい堅パン好きの男ということがよくわかるだろ？」

ミチは眼鏡堅パン越しにじつと真人の目を見る。

「わたし、視力は○あります。だから眼鏡かけると余計に見えなくなるんです。わたし最初から真人さんのことちゃんと見えていますから大丈夫です」

真人はちよつと驚いた風に見開き、そして照れたように口元を弛めると小さくありがとうといった。ミチは真人の手から眼鏡堅パンを受け取るとそれを半分に割り、片方ずつ二人で食べ、互いに口にはおぼつたまま救急隊が来るのを待った。空はいつの間にか綺麗に晴れ渡っていた。

「それでママと。パパは結婚したの？」

真人とミチの娘である小学生の陽菜は、リビングの机の上でノートを広げて大きな目を輝かせた。昨日学校で出された宿題は、お父さん、お母さんのこと、家族のことを原稿用紙にまとめるというものだった。陽菜に聞かれるまま、ミチは真人との出会いの話をいつてきかせた。

ソファに座る真人は、照れているのか新聞を広げたままだ。時折、紙面が揺れるのは笑っているのか、いや呆れて苦笑いしているのかと、ミチはちらちら目をやるが気にせず娘に話してあげる。

「すごい、ロマンチック！」

陽菜は喜び勇んで自分の部屋で原稿用紙にまとめて行った。その姿を見送って真人は新聞をテーブルに置く。「いいのなあ？　子どもにあんな嘘をいつて」

「あら、ほとんど本当のことじゃない。たつたひとつだけよ、違うのは」

「でもそのひとつは、ちいさなことじゃないと思うけどなあ」

山で迷い、足を怪我して動けなくなつたのは真人の方で、心細くて泣いているところをミチが助けたのだ。眼鏡堅パンを食べさせ、肩を抱き、楽しい話をして気を紛らわせ、無事下山させてあげたのは、鯖江近辺の山々に慣れたミチだ。

「堅いこといわないの。恋愛は柔軟に考えなきゃ」

「僕が鯖江出身でないことはすぐにはわかんと思うけど？」

「そっか、とミチはふくよかな体を揺すつて笑う。でもね、大事なことはどっちが助けたとかじゃないのよと胸のなかで呟く。」

ミチは太り気味で地味な容姿に眼鏡、引つ込み思案もあつて友だちもなくイケてない女子だった。そんなミチに視力<sup>200</sup>の真人は、眼鏡を通さなくても君の良さはちゃんと見えているといつてくれたのだ。

「陽菜も恋をする年頃になれば、わかってくれると思うわ」

そういつてミチは、テーブルの上の黒縁眼鏡を手にとり、柔らかな布で拭いた。



大きく息を吸い込み、吐き出した。

一步、また一步と地を踏みしめる。普段歩きなれない山道は、史子が予想していた以上に彼女に疲労を感じさせた。日頃の運動不足も相まって、まだ歩き始めたばかりだということのに、もう息は切れていた。

別段、激しい登山をしているわけではなかった。むしろ、登山とも言えないような標高の低い山に、史子はいた。三里山である。

三里山は、標高346メートルの小さな山だ。大抵の人は、散歩がてらにでも、大した苦心もせず登り切ってしまうだろう。

しかし、史子は極度の運動嫌い、そして運動音痴だった。誰しも苦手な道は避けて通る。史子の今の職はパソコンと向き合うデスクワークで、休日はほとんど家から出ずだらたらと過ごす日々を送っていた。

そんな史子が運動している。史子の友人たちが知れば、飛び上がって驚くだろう事態だ。この三里山に彼女がやって来たのは、勿論きっかけあつてのことだった。



「……きれい」

史子が、道の脇に咲いたツツジを視界にとらえてつぶやいた。

社会人になってから、忙しい忙しいと時間に追い立てられてきた。道に咲く花を見て感嘆の念をこぼすなんて、いったい何時ぶりだろう。史子は思念の海に心を飛ばした。

決して良いとはいえない足場を、もたつきながらひとり歩く。

しばらく無心で足を動かしていると、ぬかるみに気付かず、史子は足を滑らせた。

「わっ！ いったいなあ……最悪」

尻もちをついたことで、服は泥で汚れてしまった。思わず今日の災難を呪う。

すると、予期せぬ声がした。

「大丈夫ですか？」

若い男が、転んだ様子を見ていたのか、駆けつけてきたようだった。

史子は急に、自分の失態が人に見られていたとわかり恥ずかしくなって、

「大丈夫です！ ありがとうございます」

と勢いよく答え、さっと立ち去ろうとした。

だが、

「痛っ」

どうやら足を捻ったようで、早足で歩くことなど出来そうもなかった。

「戻りますか？ 付き添いましょうか？」

男は心配そうに声をかける。

「平気です、進みます。どうぞ捨ておいてください」

「そんなことはできませんよ」

史子は早く、男に立ち去ってほしかった。一人になりたくて、ここに来たのに。人のやさしさに触れた気分ではなかった。

「本当に大丈夫ですか」

「でも、危ないですよ。お怪我が悪化したら……」

「……どうしても、行きたいんです」

暗い顔で史子が告げると、男は困ったように笑った。

「それなら、僕も一緒に行きますよ。ちょうど一人ですから」

まるでナンパみたいだ、と史子は思った。けれど、男があまりにも屈託なく笑うので、なんとなく雰囲気のにまれてつい了承してしまっていた。

男は、タサカと名乗った。下の名前も、漢字もわからない。けれど、史子から尋ねはしなかった。年は史子のほうが一つ上だった。

「ご迷惑をおかけして、すみません」

「迷惑だなんて。困ったときはお互いさまです」

タサカは、あきれるほど善良な男だった。何について話しても、にこにこ嬉しそうに話す。初対面の人間にも好かれるタイプだ。

少しの嫉妬が影を差す。

史子がここに来たのは、失恋したからだだった。

一昨日の夜、史子のもとに、突然彼氏から電話がかかってきた。いつもと変わらない調子で受話器を取れば、いつもと変わらない様子で別れを切り出されたのだ。

あの時の、彼の言葉がまだこびりついている。

「俺、好きな子ができたんだ」

それは史子の同僚だった。温かくて、お人好しで、優しくて、純粋な可愛らしい女の子。

史子は「そう」とだけいつて、別れたいという彼氏の希望を聞き届けた。引き留めることも、なじむこともしなかった。史子は理解していた。最早何を言っても無駄だということ。

受話器を置く手は震えていた。六年、付き合っていた彼だった。

泣きたかった。恨みたかった。怒りたかった。悲しかった。けれど、史子は泣かなかった。恨むことも、怒ることも、悲しみさえも枯れてしまっていた。ただ空虚でいるほうが、傷つかないと知っていたから。

史子はそんな自分の賢しさが嫌いだった。

頭の中を空っぽにしたくて、彼との出来事を捨ててしまいたくて、気付いた時には着替えていた。そして、にこにこしていたのだ。

タサカは、彼が好きになった女の子に似ていた。顔かたちではなく、話し方や、気質、そして、笑顔の柔らかさが。

「史子さんは、初めてですか？」

「え？」

考えに没頭していて、前後を聞き逃す。タサカは気を悪くした様子もなく繰り返した。

「ここには、よく来られるんですか？ それとも初めて？」

「初めてです」

「そうでしたか。僕はわりとよく来るんです。好きなんですよ、空気が」

明らかにタサカはアウトドアが好きそうな外見をしていた。日に焼けた健康的な肌も、がっしりともたくましい腕も、それを如実に表している。

彼とは正反対だ。

「あ、見てください！ ミズバシヨウですよ！」

タサカが突然、目を輝かせた。

「ほらあそこ。あの白い花です」

「へえ。ミズバシヨウ」

「花言葉は、美しい思い出なんです。僕、ここに来るたび、美しい思い出をつくられているかな？と自分に問いかけるようにしているんですよね」

美しい思い出。

息が止まるかと思った。史子は脳裏によみがえる六年を、懸命に封じようとした。

「でも、美しくない思い出なんてないと思うんですよ。どんなにつらいことも、苦しいことも、それを乗り越えて今があるんだから、逆にとつても綺麗な思い出なんじゃないかなって」

史子の足が、止まった。

「そんなの……そんな考え方、よくできますね」

呆然としながらつぶやく。タサカは笑って、

「ずるいですかね。でも、いいじゃないですか。どうせ決めるのは後の自分なんだから、あまーくいくことにしています」

ミズバショウが揺れる。史子は何故だか踏み出せなくて、怒りのような悲しみのような、感情の渦に飲み込まれているのを感じた。

「いつか全部、美しい思い出になるんです。というかします。無理やりにもします。してやらなきゃ、悔しいじゃないですか」

その言葉が、すうつと胸に沈みこんだ。

「悔しい、ですか」

「ええ、悔しいです」

悔しい、確かにそうだ。六年もの月日を過ごして尚、引き留められなかった自分も、そうして傷心の

ままにひとりで忘れようとしていたことも。悔しい。悔しかった。

でも、タサカにすれば、全部美しい思い出になるのか。みつともない自分も、涙も、無理やり、全部まとめて過去にして美しくしてしまうのか。

「ふ、ふふっ」

なんだ、その単純で力技な解決法は。タサカに教えたことなんて何も無いのに、妙に自分の悩みを真つ向から殴ってくる様子がおかしくてたまらない。史子はくすくすと笑った。

タサカは急に笑い出した史子に戸惑っているようだったが、途中から一緒になって笑い出した。

「タサカさん。ありがとうございます」

足の痛みは消えていた。それ以上に、心の重荷が。

「いえいえ、ただしゃべってただけで結局何もしてませんからね」

「そんなこと、ありません」

史子はタサカに名字の漢字を聞いた。タサカは田阪健といった。

「田阪さんは、よく来られるんですね。ここに」

「はい、休日の朝はだいたい」

「……私も、たまには外出しようと思います」

「またお会いした時は、よろしくおねがいします」

「はい。ありがとうございます」

お気をつけて、と言いながら、田阪は軽い足取りで走っていった。  
久々の運動で、足は痛いしお腹は減った。明日はきつと筋肉痛だ。  
史子は考えた。運動不足は解消しなければならぬな、と。  
次の休日の朝も、きつとまたミスバショウを見にいくだろう。

## 近松の里たちまちスタンプラリーマップ

近松の里 たちまち スタンプラリー  
パワースポット + KOIBANAめぐり

※近松の里づくり事業推進会議で作成した冊子を掲載しています。



2013年 近松の恋物語が360年の時を経て現代によみがえる…



近松の里 たちまち スタンプラリー

パワースポット+  
めぐり



近松の里  
たちまち  
スタンプ  
ラリー



## こちろもアキパワー情報

「春を抜き、春を与える」名号岩

●名号岩 (みょうごういわ)

天神山麓の大岩石には、天保13年(1842)に刻まれた「雨無阿弥陀仏」の名号が深く刻まれています。名号には救苦と美の働きがあるとされ、通行する人々に唱えさせるものだと言われています。



伊野姫パワーで待ち人来る

●越智神社 (おちじんじや)

泰澄大師のその母「伊野姫」が祭神と伝えられている立待小学校の前の小さな社。古く泰澄大師が「子供の頃に母親が降り立って待っていた」という伝説から「立待」の名称が生まれたとされています。



近松門左衛門が幼少期を過ごした、「近松の里 たちまち」、古い面影を残す城下町には、かつて栄えた活気ある土地の記憶があります。由緒ある神社には、日々の喧騒を忘れさせる神聖な空気が流れています。豊かな自然や草花には、心身をやさしく癒してくれる力があります。そんな「近松の里 たちまち」は、2013年に近松門左衛門生誕360年を迎え、それにあわせて「さばえ近松文学賞 恋話(KOIBANA)」の募集を始めます。この冊子では、近松ゆかりの歴史と自然があふれる場所と、そこに咲く花に込められた恋話＝恋花メッセージをご紹介します。すべての場所を巡って、時を越えて人を元気にする近松のパワーに触れてください。

【この本の使い方】

近松にゆかりのある  
パワースポットを、写  
真と文章で紹介

訪れた記念に、  
ちかもんくんスタンプ  
を、押しましょう!

それぞれの場所に設置され  
た「近松の里めぐり物語  
BOX」「近松の里めぐりBOX」  
の中に、スタンプや情報誌  
が入っています。



「見どころ」「なんだろう」  
「ひとやすみ」の3つに分  
け、その場所ならではの  
ポイントを紹介

「近松との縁」では、近松  
門左衛門の幼少時代を振  
り返ります

さらに!応募してゲットしよう!

ぐるっと  
まわって  
12  
ポイント  
越前澤器製三科益特製絵馬  
をもらおう!

別紙の応募ハガキに12カ所のスタンプを全部兼ね、必要事項をご記入の上50円切手を貼り郵送してください。後日「近松の里 たちまち パワースポット+恋話めぐり」証明書とちかもんくんグッズを郵送いたします。開題日には、立待公民館・まなべの館でも受け取ることができます。また、Wチャンスとして毎年10月に開催される「たちまち 近松まつり」で抽選会を行い、抽選で「越前澤器特製三科益特製絵馬」をプレゼントいたします。  
※詳しくは応募用紙をご覧ください。

恋話＝恋花(KOIBANA)

恋話を題材とした作品が多い近松門左衛門。「近松の里 たちまち」めぐり、各所で見かけた花々にも、昔から伝わる「恋話」や花の名を録んだ「恋歌」が存在します。花言葉と恋話&恋歌を紹介しながら、プチメッセージを届けます。

2013年、近松門左衛門生誕360年『曾根崎心中』初上演310年を記念して

さばえ近松文学賞  
恋話を募集します。

【テーマ】  
近松の恋愛が時を越えて  
現代によみがえる

(400字詰め原稿用紙5枚程度)

map ナンバー

1

# 近松門左衛門記念碑庭園

(近松の里めぐり情報館)

ちかまつもんだえもんきねんていえん



東洋のシェイクスピアと称される近松門左衛門は、鯖江市が誇る劇作家。近松が幼少期を過ごした「立待」をめぐる旅は、ここ杉本町の立待公民館敷地内にある近松門左衛門記念碑庭園から始まります。庭園は、浄瑠璃に欠くことのできない三味線の形をし、初夏になるとサツキの花で彩られます。正面奥に近松の辞世文を記した碑があり、父の吉江藩士・杉森信義と近松が越前を離れるまでの解説が記されています。庭園手前には、福井県出身の作家・水上勉氏揮毫による「近松門左衛門先生由縁之地」と記された石碑も建てられています。



見どころ



近松の里めぐり情報館

立待公民館内にある「近松の里めぐり情報館」では、ただ一人の吉江藩主「松平昌親公」や、元禄三大文豪のひとつ「近松門左衛門」と鯖江との関わりについて紹介しています。文庫の人形や衣装等の展示をはじめ、鯖江市在住の創作粘土人形作家かとうかずお氏による近松と鯖江に関するジオラマ風人形や、映像、展示等があり、子どもから大人まで楽しめます。近松の幼少時代を振り返ることができます。



七歳で最期の足跡の人形



ここにスタンプをおしてね！  
+この世初の聖地で！  
物語BOXにスタンプが入っています。



サツキは「ツツジ」の別名で呼ばれます。



サツキ(杜鵑花) 花言葉: 協力を得られる、節約、野制

## 恋話

KOI BANA

中国の伝説、蜀の地に天から下った「望帝」という王がいました。その地へ治水に詳しい「べつぎ」がやって来ます。べつぎの留守中、その妻と通じてしまった望帝は自分を恥じ山の中に隠れ、苦悩の末、死んで杜鵑(ホトトギス)に生まれ変わります。最も優しくも激しく情を吐いた鳥が啼き上る。そこから美しい花が咲き、杜鵑花と呼ばれることとされています。

春メッセージ「何事も度を過ぎないよう、控えめに」





水の神(龍)と、生命の再生(蛇)のお話が伝わる

map ナンバー

2

## 西光寺表門

さいこうじおもてもん



全国でも珍しく殿号と呼ばれる寺院「石田殿西光寺」は、本願寺7世・存如が旧石田村に開いた道場を起源とし文禄4年(1595)、現在地に再建されました。表門は、吉江藩主だった松平昌親公が福井藩主を継ぐこととなり、廃藩となった吉江藩邸(館)の門が西光寺に移築されたと伝えられています。薬医門形式の門は寺院としては特異であり、建築様式でも江戸時代中期の特長が認められることなど、当時の面影を残す希少なものと云えるでしょう。国の有形登録文化財に指定されています。



ここに  
スタンプを  
おしてね!  
そこの世社の壁のすぐ  
右側80Xに  
スタンプが  
入っています。



? なんだらう

「じゃぼんこう」の由来  
江戸時代、西光寺に迎えられた第10世・寂周は、生来病弱だったため、乳母「お通」が同行、献身的に世話をします。やがて、病癒の再来とされるほど人々の崇敬を集めた寂周でしたが、徳望が高まるほど健康が気がかりなお通。ついには自分の命を寂周に捧げて欲しいと池に身を沈めます。その年の報恩講は雷雨となり、池から龍(蛇)となったお通が舞い上がったという伝説から「報恩講」が「蛇恩講」、「じゃぼんこう」と言われるようになりました。



近松との縁



大イチョウ  
西光寺の境内にある推定樹齢400年の大イチョウは、立役の歴史を見守ってきました。秋になると黄金色に輝く木を見上げ、銀杏拾いを楽しんだ幼い近松が思い浮かびます。



ケイトウ「韓藍」(からあい) 花言葉: 色あせぬ恋、情愛、おしゃべり

### 恋話

KOI BANA

「秋さらば 写もせむとわが蒔きし 韓藍の花を 誰か採みけむ」(与謝蕨村)  
秋に染めようと思って蒔いた韓藍の花が、誰かに摘まれてしまった。韓藍の花は「思い人」を意味しています。

✿メッセージ「時機を見極め、後悔するまえに告白を」



不動明王に見守られて力が湧いてくる

map ナンバー

3

## 糺野お清水

ただずのおしょうず



老杉が生い茂り、清水の湧き出る様子が京都の糺野に似ていることからこの地を「糺」と呼ぶようになりました。糺は鯖江台地の北西に位置し、大地と平地の間から湧くお清水は、神事に使われる名水として古来より大切に扱われてきました。また、野菜や農機具を洗う場所が区別され村人の生活にも欠かせない水でもありました。かつて数カ所あったお清水も、こちらを残すだけとなり年々その水量も減りつつあります。いつの日か、こんこんと湧くお清水に戻したいものです。立待村志には、糺に「糺清水」があったことが記されています。



? なんだらう



**お清水を守る白不動明王**  
糺野お清水に祀られているのは、右手に剣を持ち、左手に鏡を持つ白不動明王。あらゆる「魔」を滅ぼし、幸福を与えらるる仏様は、昔も今も糺野お清水の水源を静かに見守り続けます。



近松どの縁



水路脇に隠れるように存在する糺野お清水

清水川から西光寺前を流れる水路脇に、今は一つになってしまった糺野お清水があります。近松の頃は、数カ所のお清水が水量も豊かにこんこんと湧き出ていたそうです。



ここに  
スタンプを  
おしめてね!  
その  
近松の影響でRBOXに  
スタンプが  
入っています。



水際に咲く白い花



バンジー(すみれ) 花言葉:物思い、私を思ってください、私はあなたを思う、純愛

恋話  
KOH BANA

ヨーロッパでは古くから、愛する人に「天使に愛された花」のいい伝えをもつバンジーの花を贈ります。天使に愛された花が奇縁を起こしてくれそうです。

※メッセージ「素直な気持ちも、花に託してみては」



人と人を繋ぎ、物事をスムーズに運ぶ

map ナンバー

4

## 石田の渡し場跡

いしだのわたしばあと



江戸時代から明治頃まで、水量が豊富な日野川では船を利用して「河川交通」が盛んでした。米やさまざまな物産が船積みされ三回湊まで運ばれました。古い文献によると、この石田にも舟渡し場があったとされ、日野川に交差する「浜街道（越前海岸から吉川に至る街道）」の渡し場として利用されたことが記されています。長さ18m・幅2mほどの渡し舟が一艘あり、石田橋50m下流の大きな柳が船着き場になっていたようです。明治40年代、道路が整備され木製の橋が架かると石田の渡し場も廃止されました。



ひとやすみ



**渡し場跡で往時を偲ぶ**  
現在、石田の渡し場跡がある日野川の河川敷には、青い芝生が植えられ整備が進んでいます。渡し舟が行き来し、旅人の足となっていた見晴らしのいい渡し場跡を眺め、往時を偲びましょう。



近松との縁



### 近松と幸若舞を繋いだ石田の渡し

近松作品に大きな影響を与えたとされている「幸若舞」は、越前朝日町を発祥の地とし、能や歌舞伎の原型と言われています。近松は、この「幸若舞」を見るため石田の渡しを利用したのでしょうか。現在の石田橋の欄干は、当時をイメージした渡し舟がモチーフになっています。



ここに  
スタンプを  
おしてね！

石田町  
近松の里めぐりBOXに  
スタンプが  
入っています。



子どもの顔を思い出す  
クローバーの花言葉。



クローバー（シロツメクサ）

花言葉「約束、恥を思い出してください」

### 恋話

KOI BANA

アイヌの青年が恋人に逢いにくためにのった舟が沈みました。恋人は彼の亡骸を体に結び、沼に身を投げました。翌朝、その周りはクローバーが咲き乱れたそうです。

※メッセージ「約束をおろそかにすると、気持ちはずれ違います」



難関突破! 遠回りしてこそ得られるものがあるはず

map ナンバー

5

# 吉江七曲り通り

よしえななまがりどおり



正保2年(1645年)から29年間、松平昌親公を藩主とする吉江藩がありました。七曲りは吉江藩の城下町の名残りで、町人町の一つ新町から藩主の住む陣屋までの道のりを、七曲りの名の通り何度も屈曲させ大回りさせるという城下町特有の道路構造をしています。当時は、入口には木戸、境に高札場があったと言われています。現在は当時の佇まいを見る事は出来ませんが、変わらない地割りや道路から吉江藩当時の様子を伺い知ることが出来ます。



ひとやすみ



## 古い町並みと桜の木

吉江藩2万5千石の城下町の面影が残る、七曲り通り。一年を通して賑わっていますが、春には桜の花で彩られ、美しい風情を醸します。



近松との縁



## 近松が暮らした城下町

10年余りをこの城下町で暮らした近松。この界隈に足を踏み入れると、幻想的な雰囲気、文化的景観と古民家のすばらしさを堪能できます。当時の力平型の通りが現存し、町屋、商家などが住師を思い起こさせてくれます。



ここに  
スタンプを  
おしめてね!

この  
伝統的景観の中心部に  
スタンプが  
入っています。



**サクラ** 花言葉: 純潔、優れた美人

**恋話** KOI BANNA

「あしひきの 山桜花 一目だに 君と見れば 我れ恋ひめやも//大伴家持  
山に咲く桜の花をあなたと一緒に眺められたなら、こんな風に花が恋しいと  
は思わないでしょう...病の床から恋人を思い詠んだ歌です。

※メッセージ「心が通じていても、言葉で伝えることも大事です」





悪夢を良い夢に替えてくれるという歴史ある古いお寺

map ナンバー

6

## 福正寺 ふくしょうじ



吉江藩関係の史跡が数多く残される吉江町周辺。こちらの福正寺もそのひとつで、創建は文治2年(1186)。元は天台宗の寺院でしたが長享2年(1488)に浄土真宗に改宗。戦国時代の戦火を被りながらも寺坊が守られ、松平昌親公が吉江藩邸を建築する際、土地を交換し現在地に寺域を定められました。この時、松平昌親公より多くの材木を寄進されています。長い歴史と人々の祈りに培われた不思議な力が感じられます。



ここに  
スタンプを  
おしてね!

そこの  
番札の裏側く/BOXに  
スタンプが  
入っています。



ピンクと白の千日紅  
まよい花がゆらゆら。



### 見どころ



#### 本堂正面軒下に 不思議な雲獣

こちらの木鼻に彫刻されているのは「雲獣」。雲獣は、悪夢を食べてくれたり、悪夢を良い夢に替えてくれたりするそうです。



### 近松との縁



#### 近松が遊んだ 歴史ある古いお寺

近松が、吉江藩士となった父と一緒に移り住んだのは福松君(松平昌親公の幼名)が元服した明暦元年。このとき近松は2歳。このお寺の境内で遊ぶ近松を思い浮かべることができます。



スズラン

## 恋話

KOI BANA

花言葉「幸福、繊細、幸福が戻ってくる、純潔」

春の女神オスタラが、この花の守護神。パリの風習では5月1日にこの花を贈ると幸福が訪れるという、恋人に捧げる花です。

※メッセージ「終わることは、はじまること。一步踏み出しましょう」



「学問の神様」菅原道真と乙千代丸を祀る親子愛パワー

map ナンバー

7

## 西番天満神社

にしぼんでまんじんじや



ご祭神は、「学問の神様」として知られる菅原道真公。公の第3子である乙千代丸がこの地に住み、公の像を彫ったとされています。その後、落雷により御神像は焼失し、作り直されました。菅原道真公を祭神とする西番天満神社は、近松の父が仕えた吉江藩主・松平昌親公の祈願所でした。立待の里の総鎮守の社でもあり、村人の信仰を集めてきました。後年60歳を越えた近松は、菅原道真の大宰府への配流を題材にした「天神記」という傑作浄瑠璃を書き上げます。



見どころ



### 乙千代丸神社

乙千代丸は、菅原道真公の第3子。父菅原道真が大宰府へ配流になったとき、京都を逃われ、家臣とともに立待地区の杉本の地に辿り着きました。乙千代丸は、神像を削り、父の道真として朝夕拝しました。その像を収めた天宮岩の横に寄り添うように、乙千代丸を祀る神社が建てられています。



近松との縁



### 国性爺合戦の絵馬

近松の代表作のひとつ「国性爺合戦」は時代物の中でもっとも有名な作品。その絵馬が奉納されています。このあたりで一冊大きな絵馬として知られています。



ここに  
スタンプを  
取ってね！  
そのお世評の書場で  
物語BOXに  
スタンプが  
入っています。



### ウメ 恋話

花言葉：高潔な心、潔白、愛んだ心、幸福

「春なればうべも咲きたる梅の花君を思ふと夜寐(よい)も寝なくも」/管城守極氏安麻呂 梅は「君」のこと。恋する人を思うと夜も寝られない…寝れない夜の恋心を詠んでいます。

※メッセージ「強がらずに、会いたい気持ちを素直に表現してみてください」



吉江藩が成立した正保2年(1645)、吉江藩主・松平昌親公は陣屋や町並みを整備。従来の町に新しく整備した町をあわせて「十一口」、これを縦に並べて「吉江」とされ、立待郷吉江町が生まれました。昌親は、この頃から政治家としての手腕をふるい、土地を開墾し新しい農地を開拓したり、鍛冶屋や木綿の織物職人の育成など、商工業に力を注ぎます。結果、吉江は丹生郡の政治経済の中心として隆盛を極め、「小江戸」と呼ばれるほどでした。延宝2年、兄の福井藩主・光通が死去し昌親が福井藩主となるまで、わずか30年足らずでした。



松平昌親公 瑞雲寺蔵

正保2年(1645)、結城秀康の子で第3代福井藩主・松平忠昌が死去。その後を子の松平光通が継ぐ。その時、松平光通は、弟の松平昌親公に2万5千石を分与するが、越前国内各所に分散していたため、まず本拠地の運営を行わねばならなかった。慶安1年(1648)、松平昌親公は母所を吉江に設置することを許可され、吉江藩が成立しました。



近松との縁

近松の父が仕えた吉江藩

立待郷吉江の町が生まれた正保2年、昌親公はまだ6歳でした。その時、養育係となった付き人の中に近松の父である杉森信義の名があります。昌親公が元服したときに、杉森信義も2歳の近松とともに吉江に入ります。



ここに  
スタンプを  
おしえてね！  
※この近松の書簡で1  
冊はBOXに  
スタンプが  
入っています。



石積の傍らに、  
ナadeshikoの花をみつめました。

ナadeshiko 花言葉：純愛、恋慕

**恋話**  
KOH BANA

「ひさかたの雨は降りしくなでしこが いや初花に 恋しき我が背！/大伴家持  
雨が降り続いても、咲きたてのなでしこのように恋しく思われるあなた…慕  
る恋心を隠んでいます。

※メッセージ「毎日が楽しくなるような、何かに恋してませんか」

「東洋のシェイクスピア」と称される近松を学んで諸芸上達祈願

map ナンバー

9

## 近松門左衛門坐像

ちかもんくんざいもんざそう

(近松情報案内所)



鯖江市には、歴史・伝統・文化を感じるすばらしい地域の宝があります。その中でも全国に誇れるブランド力の高い宝として、江戸時代の文豪(浄瑠璃・歌舞伎作者)近松門左衛門の存在があります。2歳から10年あまりの多感な少年時代を吉江で過ごした近松。その土壌は、越前鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。浅水川沿いの通りに面した見晴らしのよい場所に、作品を執筆しているかの如く筆を走らせる近松の坐像がどっしりと鎮座しています。

近松門左衛門の坐像が、ここに設置されています。

ここに  
スタンプを  
おしてね!



うつくしき和風な香りの花が  
ちかもんくんを彩っていました。



ひとやすみ



### 近松情報案内所

近松関連の情報や案内チラシがたっぷり。「近松の里 たちまちめぐり」の情報拠点となる案内所です。無料レンタサイクルも完備しています。

ちかもんくん号に乗って  
散策しよう!



### 無料レンタサイクル

「近松の里」を散策するのに、無料レンタサイクルをご利用ください。

連絡先: 現地にてご確認ください



## ユリ 恋話

KOI BANANA

花言葉: 純潔、誠実、無垢

「さ百合花 ゆりも逢はむと 下庭(は)ふる 心しなくは 今日も経てもよ/大伴家持 百合は「あとで」と重なる言葉、後で逢えると思わないと、今を過ごせない気持ちを表します。

※メッセージ「深呼吸、どちらも大事なら自分のペースを大切に」





信じる人に幸運を招く「三度栗」の不思議な話

map ナンバー

10

## 大谷公園

おおたにこうえん

(実のなる公園)



大谷公園には、親鸞上人の「三度栗縁起」という伝説に由来する3本の栗の木があります。越後に向かう親鸞が、民家で説法をしました。しかし、誰も話を信じなかったため、焼き栗を庭に植え「この実が年に3度実を結んだならば、私の説法に嘘はない」と言い立ち去ります。後に、栗は1年に3度実を成し、「三度栗」と呼ばれました。3本の栗の木は、その子木を移植したもので、「実がなる」が「実る」となり、心願成就のご利益があるとされています。



ここに  
スタンプを  
おしてね!

この  
近松の聖徳寺IBOXに  
スタンプが  
入っています。



今が掛けがらう懸へと...  
お理想的な写真に出会えます。



ひとやすみ



### 実のなる公園

グミ、栗、柿、イチジク等、実のなる樹木を植樹して、四季を通し「育て、収穫し、食する」といった体験学習型公園を目指しています。起伏に富む地形を活かした楽しい空間で、子供たちも自由に遊べます。



近松との縁



### 近松が愛した 立待の風景を眺める

左右の竹林を仰ぎ見ながら石段を登りつめると、見晴らしの良いのどかな立待の町の景色が広がります。うぐいすを始め、いるいな野鳥の声を楽しみながら、近松が愛した城下町に思いを馳せましょう。



リンドウ

## 恋話

KOI BANANA

花言葉:正義、恋している時のあなたが好き、さびしい愛情

平安時代、おしゃれな花とされ、女御たちの衣裳の模様に使われました。リンドウが1本で咲く姿から「恋しているあなたを愛する」というやさしい花言葉ができました。

※メッセージ「落ち込んだときは、ひとりの時間も必要です」



まっすぐ伸びる大杉にあやかって成長を祈願

map ナンバー

11

# 春慶寺

しゅんけいじ



寺伝によると、春慶寺の前身は泰澄大師が白山修行に立つ際、立待にあった草庵に名づけた「心敬寺」にあるとされます。戦国時代には、心敬寺を中心に一千坊がひしめいていましたが、織田信長の越前侵攻の焼き討ちに遭い現在の寺院だけが残りました。正保2年(1645)吉江藩成立後、藩主・松平昌親公の篤い信仰のもと、寺号を天台宗「春日山 春慶寺」へと改め、同藩の祈願所に定められました。泰澄大師伝記には、大師が三十八社より越知山へ通う途中、一草庵であった当寺において香や菓を供えて選擇したとあります。寺の西側には、徳川家家紋の原型になった「二葉葵」が植えられています。



ここにスタンプをおしてね!  
そのお寺の歴史の豊かで「おX」にスタンプが入っています。



大きな梅の実は、毎年見事な花を咲かせます。



## 見どころ



本堂脇に鯖江市指定文化財 推定樹齢400余年の御神木(大杉)の、まっすぐ伸びたその姿に「子どもがすくすくとまっすぐ育ちますように」と祈願する人も少なくありません。その傍らに、室町時代から近代にかけて造立された117基の石造物が遺存されています。これほど多く遺存しているのは、市内でも稀であり貴重だそうです。



## 近松との縁



幻想的な椿に何を思う…  
境内に群生する椿、散りゆく花が辺りを深紅に染めるその様は幻想的で美しい。幼少の頃、この寺の一角を借り住んでいたといわれる近松は、どんな思いでこの花を愛でたのでしょうか。



ツバキ

## 恋話

KAN BANA

花言葉「完全な愛、完璧な魅力、理想の恋」  
『あしひきの八雲の椿つらつらに見とも館かめや 福点でける君』大伴家持見飽きることがあるでしょうか、この椿を植えたあなたを…椿は古事記にも登場する、神聖な樹木です。  
※メッセージ「鏡の中の自分、見つめてみて」



近松の産湯伝説のある、千古の昔より湧き出る健康長寿の水

map ナンバー

12

## 榎お清水

えのきおしょうず



春慶寺本堂横の竹林の中の小径をほんの少し下って行くと、お泉水「榎お清水」のある山麓に出ます。ここは、千古の昔より湧き出ており、健康長寿の水として親しまれ、村人や旅人はお不動様の手を合わせ、お清水で喉を潤したといわれています。近松の時代、吉江藩主・松平昌親公は「榎お清水」を笥谷石で3つに仕切り、水飲み場と洗濯場を整備して村人の憩いの場とし、さらに吉江の城下町に水を引き入れるため木樋を敷設して上水道を整備しました。池の中心は三味線のバチの形をしています。



ひとやすみ



**お不動様が見守るお清水**  
近松の時代から、廻れることなく今なお水を蒸えています。カルシウムやマグネシウムなどのミネラル分が豊富で、濃度の炭酸ガスを含んでいるまるやかで清涼感のある水は、平成22年「ふくいのおいしい水」に認定されました。市指定文化財にも指定されています。



近松との縁




**近松少年が親しんだ水辺**  
お清水付近は「池泉広場」として整備されています。その裏の崖から時折、お清水が湧き出る様は、見ているだけで心落ち惹かせてくれます。また、近くには蓮池や中瀬池があり、近松少年が親しんだ水辺の自然環境を再現しています。近松作品には、蓮の花が多く出てきます。この辺りで遊んだ当時を思い出して作品を描いたのでしょうか。



ここに  
スタンプを  
おしえてね！  
その名の通り聖地です！  
物語BOXに  
スタンプが  
入っています。



榎お清水に咲く花々を  
眺め楽しむことができます。



ハス

# 恋話

KOI BANANA

花言葉 愛情がけつん完、離命、静恋

中国の伝説。夏の深夜、月の仙女は下界の川面を鏡に化粧をしていた。その美しさに見惚れていた川の主の心に惹きつけられ、葉の象徴とされるかんざしをうっかり落とってしまう。川の主は急いで水面に浮上するが、川面には蓮の花が一面に咲き乱れ、持っていたかんざしも蓮の花びらに変わっていた。川の主は唇を返すことができます。恋は実らなかった。

**\*メッセージ「結果を求めすぎないで、まずは冷静に」**

## 江戸時代を代表する文豪

# 近松門左衛門

ちかまつもんざえもん

人形浄瑠璃や歌舞伎のすぐれた作品を数多く残した近松門左衛門(1653～1724)は、多感な少年時代、人間形成の大切な時期を鯖江で過ごしています。義理人情に悩む日本人の人間らしい姿を描き出す近松文学の土壌は、鯖江の豊かな自然と人情、風情に育まれたと言えるでしょう。「東洋のシェイクスピア」と呼ばれるほどに、人間の悲しさや悪かさ、やさしさを描いたその作品は360年を経た現在も愛され続けています。



近松門左衛門作書之像  
(18) 林泉文庫蔵

鯖江市では「豊かな自然につつまれる魅力と、人と歴史が見える「近松の里」づくり」をテーマに、住民と行政が一体となって、まちづくりを進めています。



「ちかもんくん」は、鯖江で少年時代を過ごした文豪近松門左衛門により親しみ、また近松文学に対する理解を深め、それをもとに「歴史を活かしたまちづくり」や「近松の情にふれあうまち鯖江」を広く内外にPRするための公募により決定。近松門左衛門の少年期をイメージして平成10年に誕生しました。



### 近松情報インフォメーション

鯖江市まなべの館 2F「近松の部屋」

〒916-0024 福井県鯖江市長泉寺町1-9-20 Tel.0778-53-2257

立待公民館 「近松の里めぐり情報館」

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2 Tel.0778-51-3376

近松会館 「近松情報案内所」

〒916-0024 福井県鯖江市吉江町15-77-7 ※無料レンタサイクルあります。

[www.city.sabae.fukui.jp/index.html](http://www.city.sabae.fukui.jp/index.html) (鯖江市ホームページ)

## 近松の里づくり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内) Tel.0778-51-3376



■さげえ近松文学賞2016〜恋話(KOIBANA)〜■

平成28年10月8日 発行

近松の里めぐり事業推進会議

〒916-0005 福井県鯖江市杉本町702-2(立待公民館内)

TEL 0778-51-3376

【電子書籍版】

発行社 [DoCompany出版\(ボボブックス\)BoboBooks](http://bobobooks.com)

東京都港区南青山2-2-15ウイン青山14階

TEL 050-3692-4434 FAX 03-6369-4449

福井県福井市灯明寺1丁目1-201

TEL 0776-28-5233 FAX 0776-28-5234

<http://bobobooks.com>